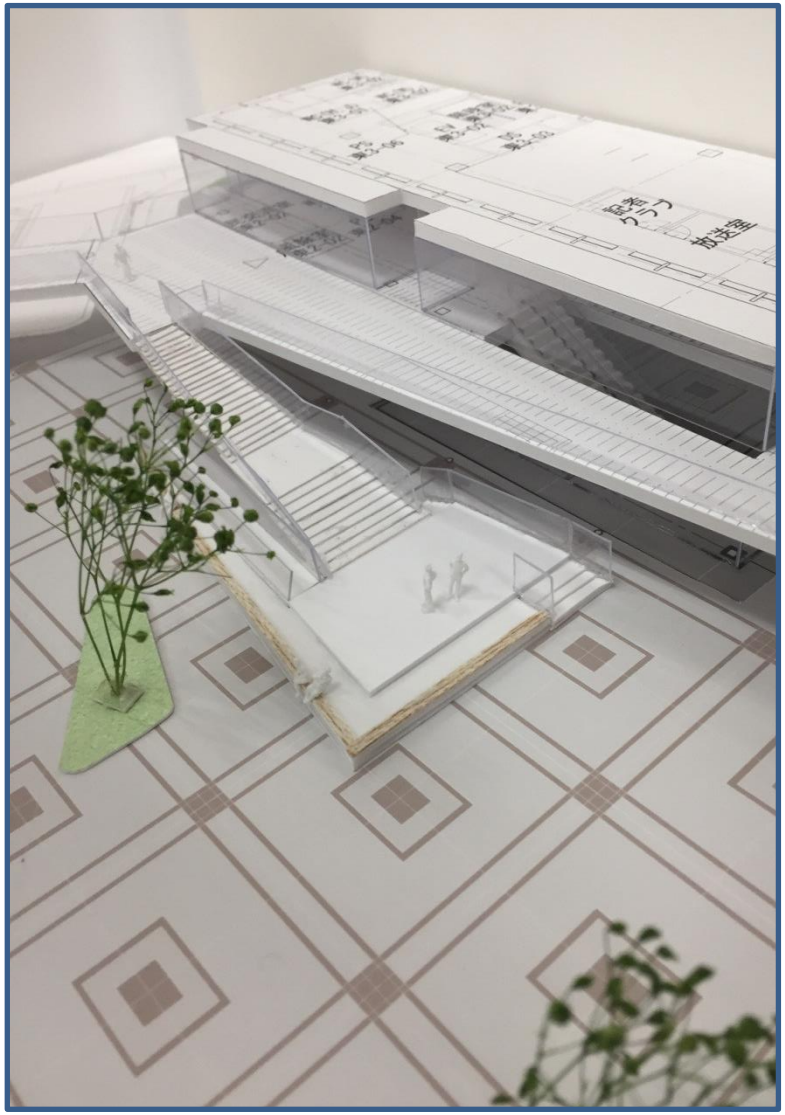
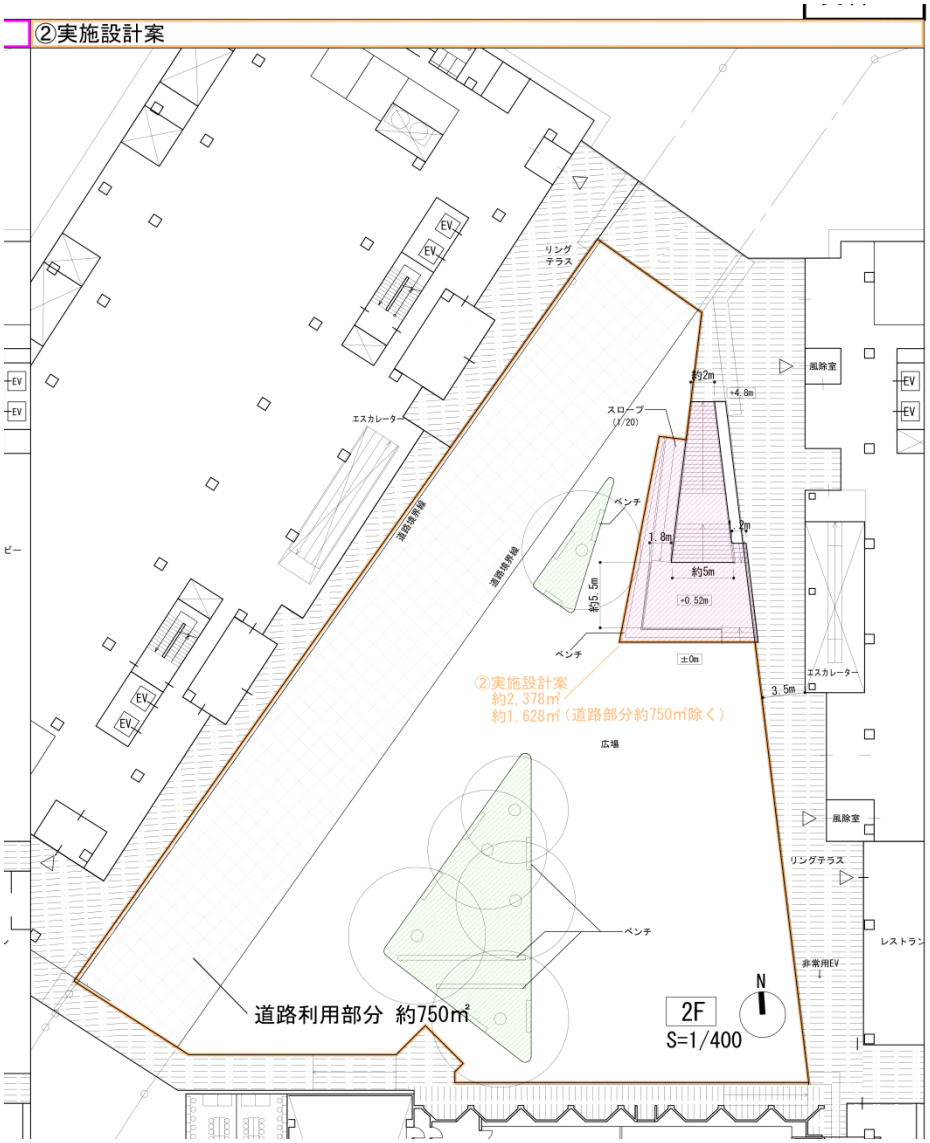
設計案の考え方について

リングテラス・階段の設えについて



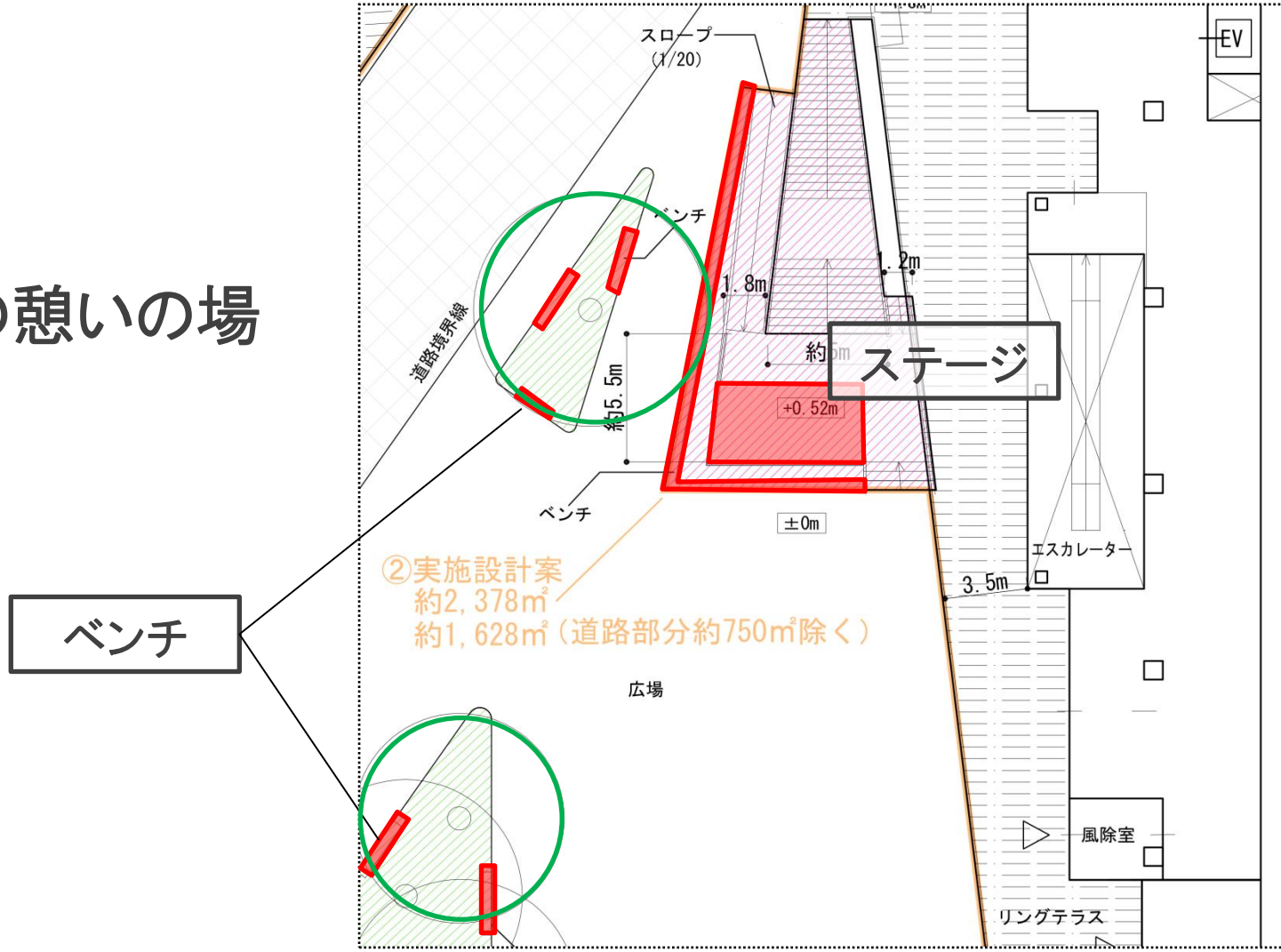


広場とリングテラスをつなぐ階段については
ゆったりと登る大階段でつなぎ、一体的な広場利用に配慮。

リングテラス・階段の設えについて

改善

・日常利用の憩いの場



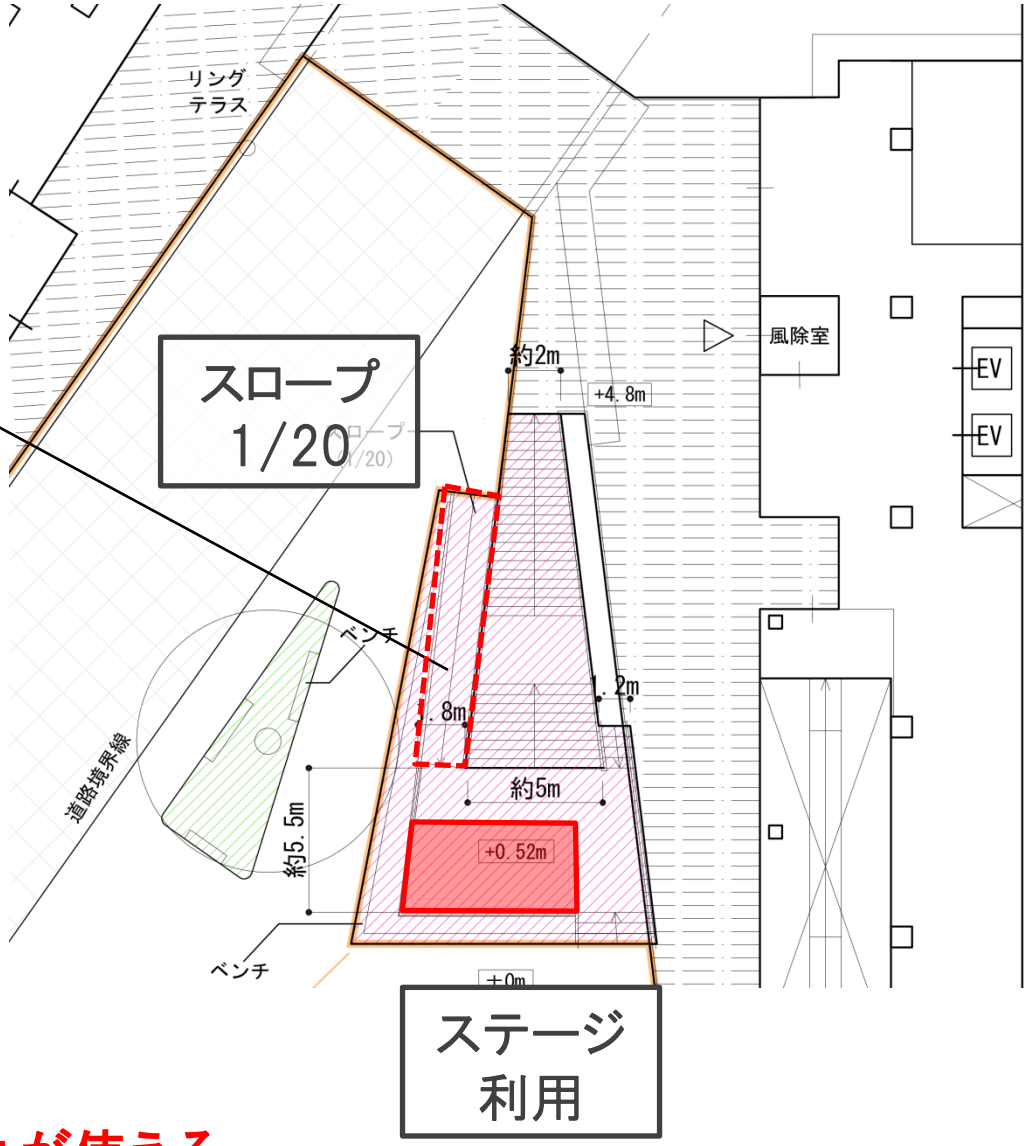
ベンチ

ベンチもあり、日常利用の憩いの場。
車いすの方も安全に利用できるステージ、
災害時の安全な避難、

リングテラス・階段の設えについて

改善

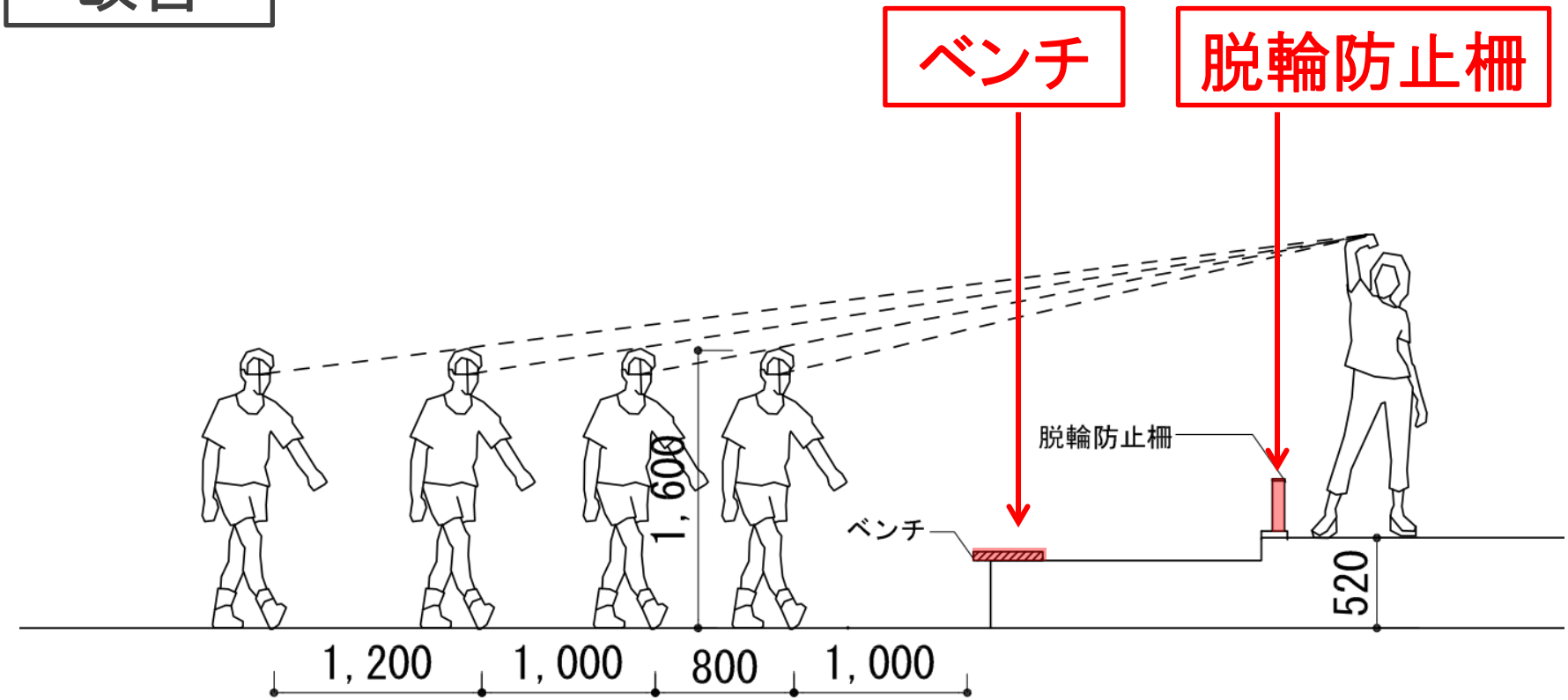
・誰もが安全に利用できるスロープ



誰もが使える、
ステージ利用ができる階段を設置。

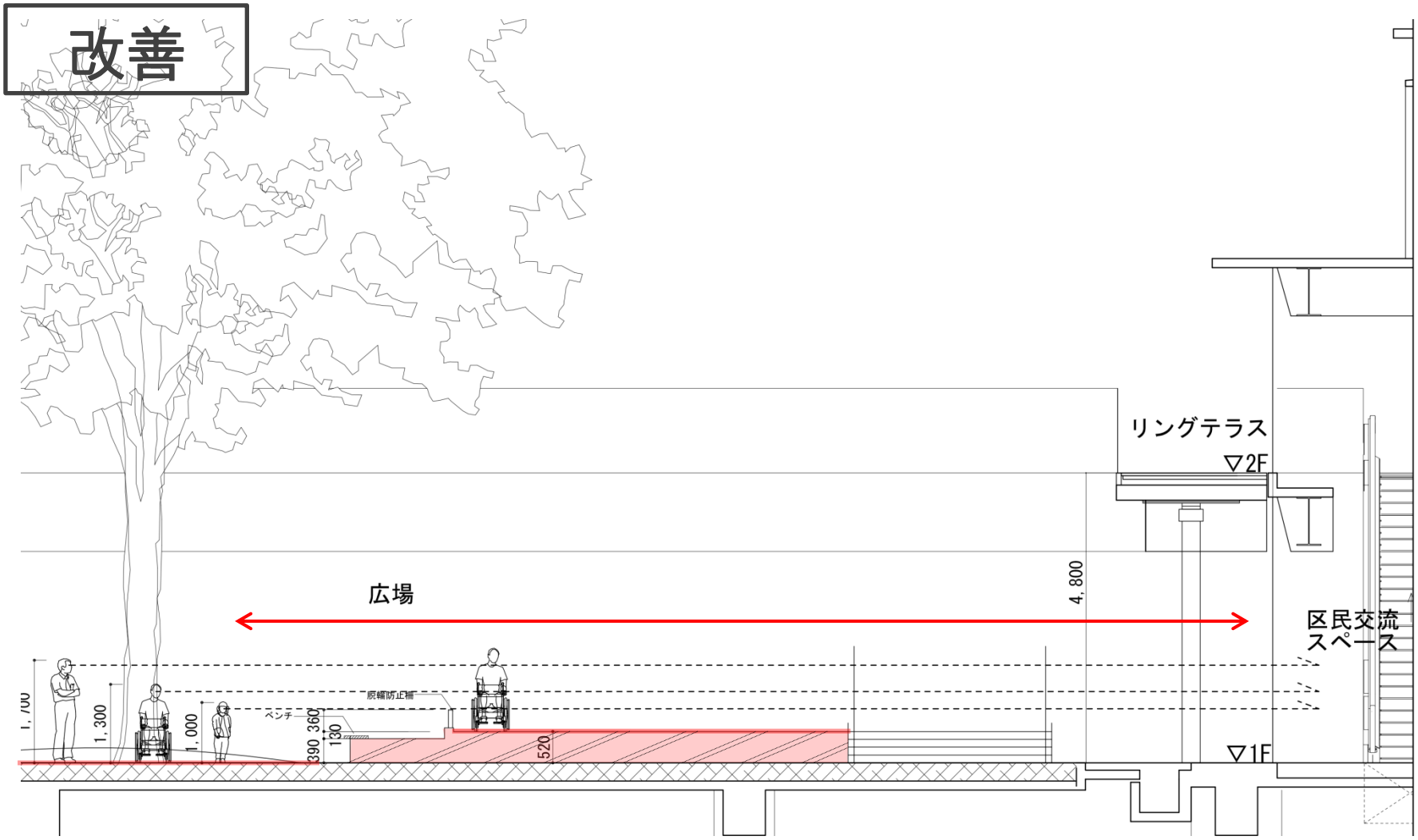
リングテラス・階段の設えについて

改善



ステージ高さは、H520（階段H130）とし、
安全手すり、日常利用のベンチを設置。

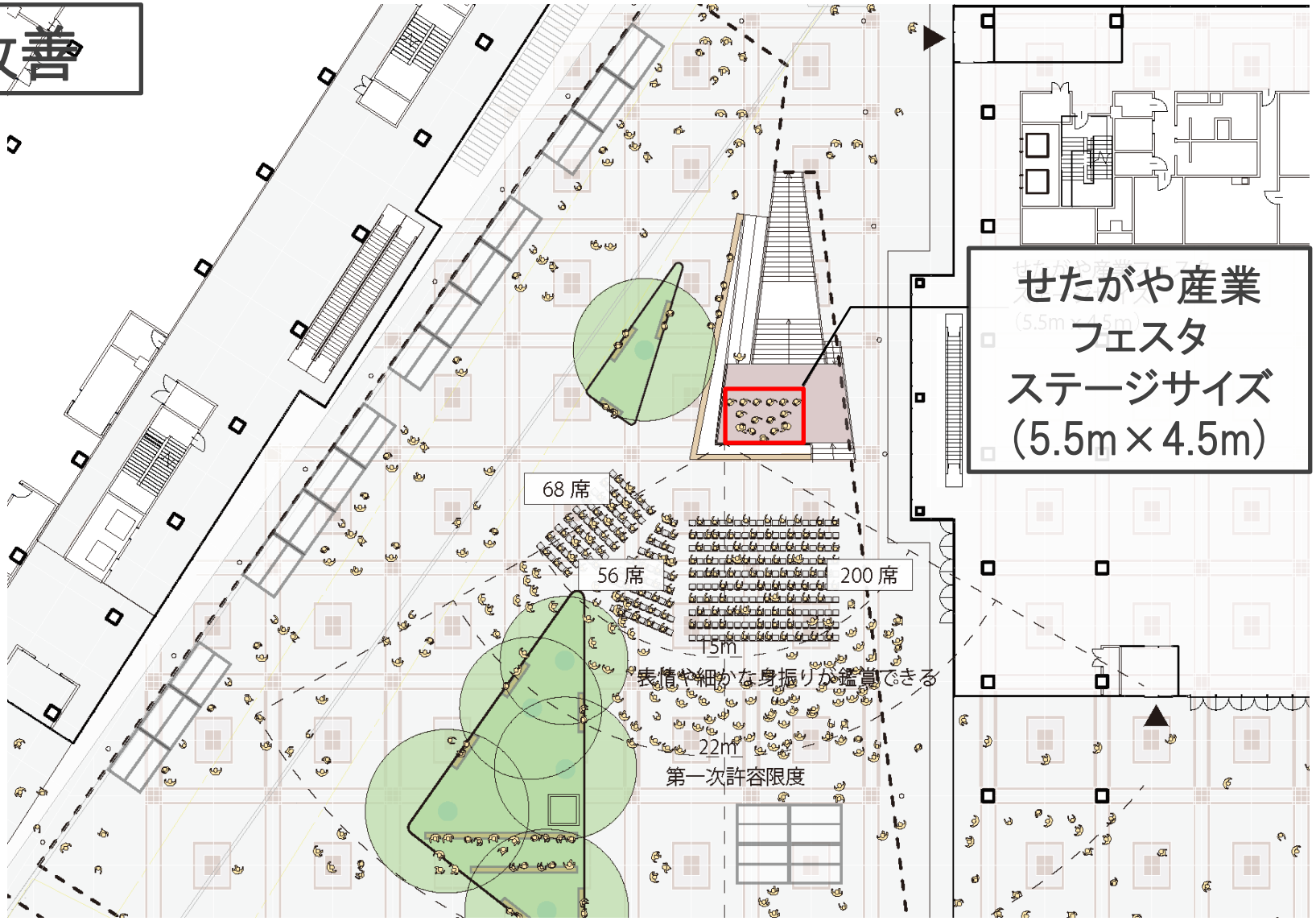
リングテラス・階段の設えについて



ステージ周りは、視線が通り、広場と一体となった設え。

リングテラス・階段の設えについて

改善



現在行われているイベント、世田谷産業フェスタ

広場から見た景観

ピロティに向けた位置から階段を見るイメージ

前川國男の設計に関する考察

継承の手法A

広場の構成と設計背景 エスプラナード(A)

埼玉県立博物館

広場のデザインにおいて、「エスプラナード」あるいは「憩いの広場」と前川が呼称する設計手法。明確に「エスプラナード」と記述した作品は「埼玉会館(1966年)」からであり、その萌芽は1950年代初期の作品から見られる。以降公共建築(美術館・市庁舎)を中心として、多くの建築作品で採用。

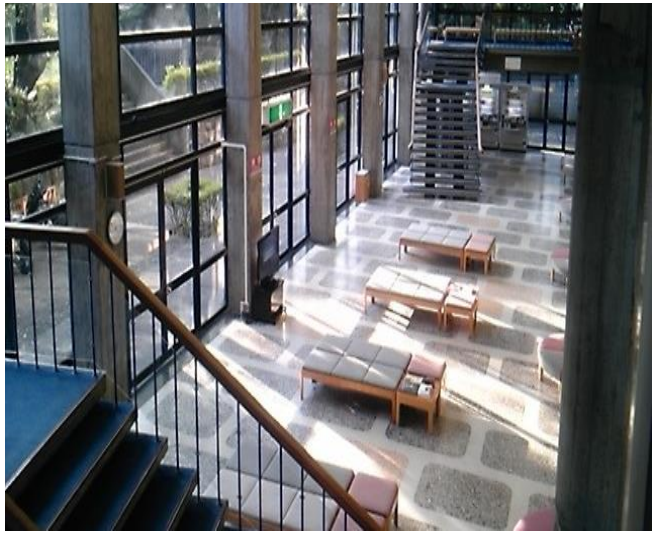
前川國男は「**エスプラナード**」の空間を「**人が憩いを持ちながら、目的もなく歩く中庭的広場・遊歩道**」(1)と説明。また、**中庭**に関しては「中庭に対するイメージをコルビュジエに教わったと思うんだ。ヴェルサイユのなかを一緒に歩いているときに、ここがとてもいいっていう、そのわけをコルビュジエが一所懸命ぼくに説明してくれた。そのことが頭に非常に残っていてね、つまり**なんとなく囲まれていて自分がこうプロテクトされている感じ**をもつだろう、それがおれにはいいんだ」(2)と述べており、憩いの広場のイメージを師であるコルビュジエから教わったことがわかる。

前川國男が呼称するエスプラナードとは、**なんとなく囲まれている中庭的広場と、中庭を巡る目的性のない遊歩道が連なる一連の空間構成**と考えられる。

(1)「前川國男　現代との対話」松隈洋,P31
(2)「一建築家の信条」前川國男 宮内嘉久編,P195

継承の手法B

内外の空間の連続性



上：神奈川県立音楽堂　下：京都会館

建築内外の連続 （B-1）

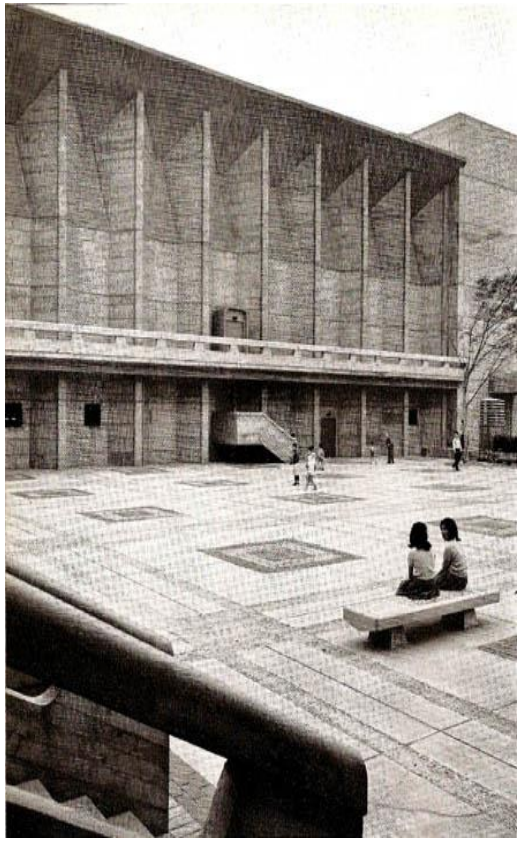
エスプラナードは単純に閉じた内庭という空間ではなく、**一方で都市に繋がり、また一方で建築の内部空間に連なる**、目的のない憩いの空間として連続して展開。

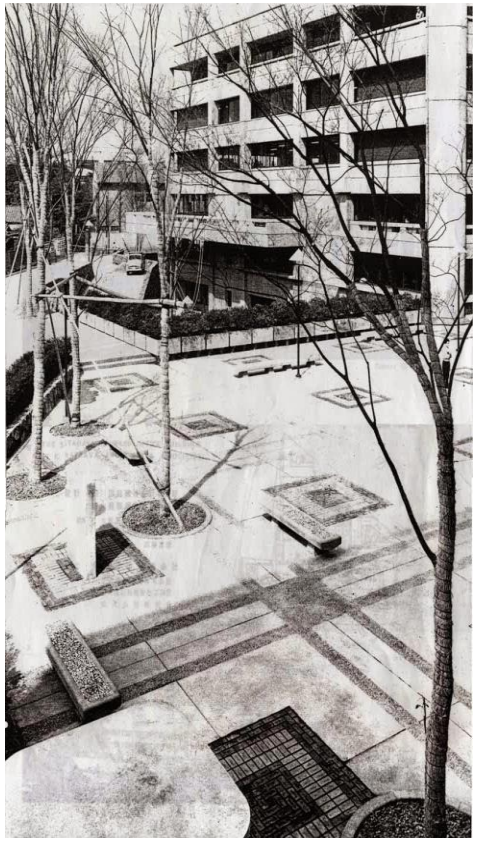
世田谷区庁舎や、京都会館等では敷地の中心となる中庭には**ピロティをくぐる**ことで都市から接続されており、ピロティからは吹き抜けのあるエントランスホール、ホールからは中二階の回廊、回廊からはテラスへと建物内外を隔てず連続して展開。このように、エスプラナードが建物内外を貫通することで「**内部が外部化**」「**外部が内部化**」され、施設全体に流動性を生む構成となっている。

前川が、「人が憩いを持ちながら、目的もなく歩く中庭的広場・遊歩道」と説明しているエスプラナードは、建物内外に連なる動線の中に**広場のベンチやホールのベンチ**など**市民が気軽に留まる**ことのできる空間を配置するという、**流動性と滞留性が混ざり合った全体性**により獲得されている。

内外の空間の連続性

継承の手法B





世田谷区役所　中庭部分

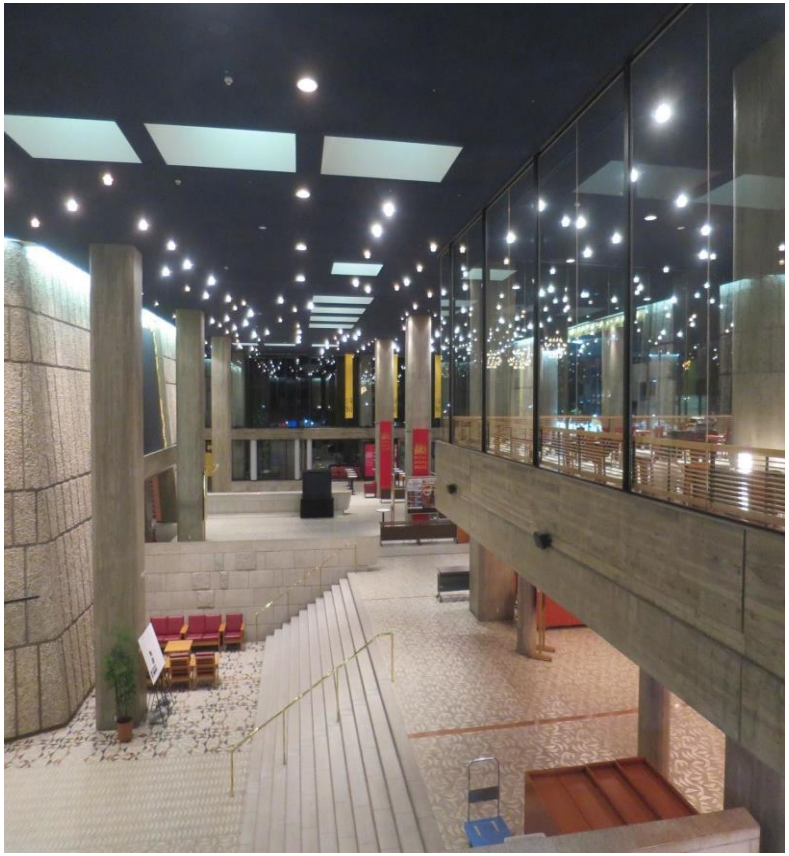
天井、床仕上げの連続（B-2）

前川作品の特徴として、外部に面するホワイエやホールでは、**天井や床の素材を外部空間と連続的に設えている**ものが多い。建物の内外で仕上げを切り替えるのではなく、ホワイエやホールでは大きな囲いとして設え、**入れ子構造のように階段や中2階を配置**している。

このことからも前川が空間として外部と内部を明確に分けるのではなく、**エスプラナードとしての空間の連続性**を重要視していたことが伺える。

内外の空間の連続性

継承の手法B



東京文化会館

プログラムの連続性（B-3）

前川は日本各地で文化施設の作品を残しており、それらの作品郡からは前川の**芸術を鑑賞する空間のあり方**の思想を読み取ることができる。
東京文化会館、ロームシアター京都（旧京都会館）などは芸術鑑賞後にふらりと立ち寄れるカフェが併設されており、市民達の憩いの場となっている。
オーディトリアムと飲食施設の関係について前川は「**音楽を聴いたあとで、お茶のひとつも飲めずにそそくさと帰らなきゃならないなんて**、味気ないもんだね、ほんとに。…それではオーディトリアムの半分しか利用されてないに等しいと考えるべきだと思うね。」（3）と述べており、芸術後の読後感を楽しむ場の重要性について言及している。
つまり、**文化施設は単に芸術を鑑賞する箱を用意するのではなく**、その**前後の行為と、そのための空間を重要視**して設計を行っていたことが伺える。

（3）「一建築家の信条」前川國男 宮内嘉久編,P200

内外の空間の連続性

継承の手法A

ホワイエ・エントランスホール（B-4）

エスプラナードに連なるエントランスホールやホワイエでは、**吹き抜け空間**で構成されることが多く、**上階の回廊と合わせ、立体的な視線の抜け**が確保。
世田谷区民会館（区庁舎）のように、吹き抜け部には意匠階段が配置され、より効果的に空間の広がりを演出。**施設全体に流動性を生む**構成。
　また、前述の**オーディトリアムに併設されたカフェ**は**エスプラナードに連なるホワイエ等に面して配置**される（例、東京文化会館弘前市民会館）ことが多く、**市民の憩いの空間を中心**に建築を構成しようとする前川の設計姿勢を読み取ることができる。

微地形の形成

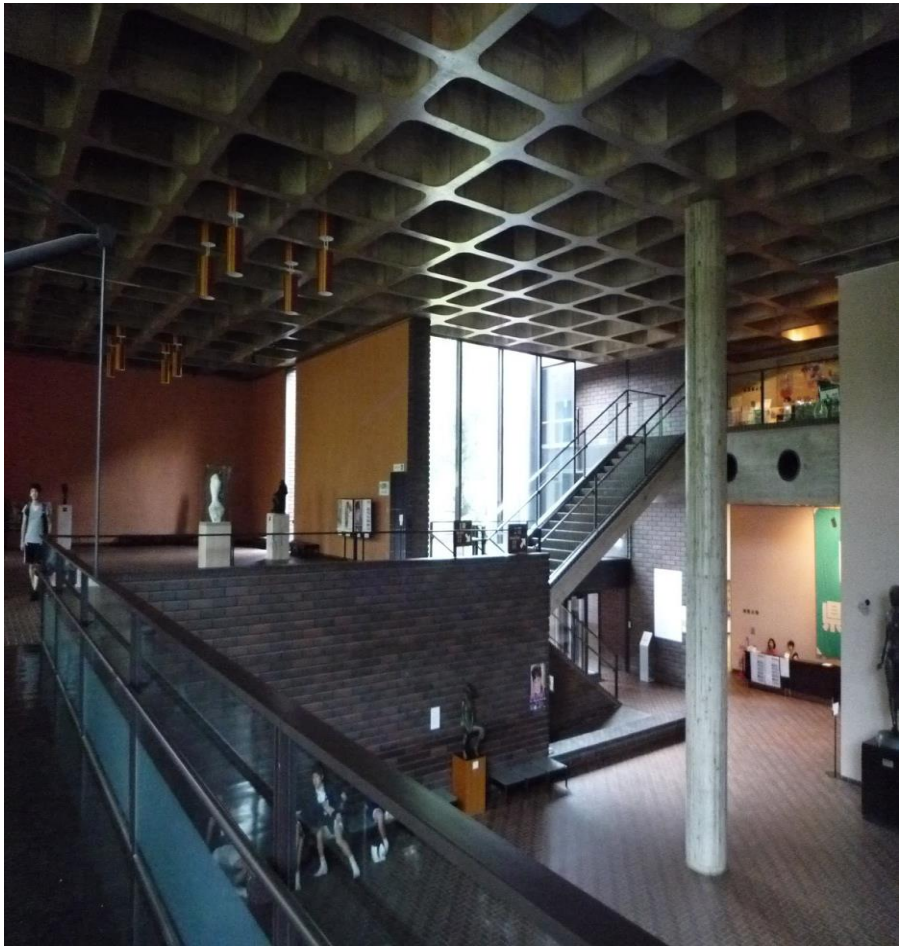
継承の手法C

階段、半地下、人工地盤 （C）

レベル差のある敷地における前川の設計では、外構は、**階段や半地下など地形と連続して展開**されることが多い。**アプローチ、広場、建築が地形**と一体化されることで**敷地全体を都市の連続体**として位置づけられていると考えられる。
東京都美術館では、アプローチと同レベルで人工地盤が計画され、周辺の人の流れを受け入れつつ、地下空間を効果的に配置することで、入り口までのアプローチに魅力が生まれている。

左上：東京都美術館　左下：東京文化会館

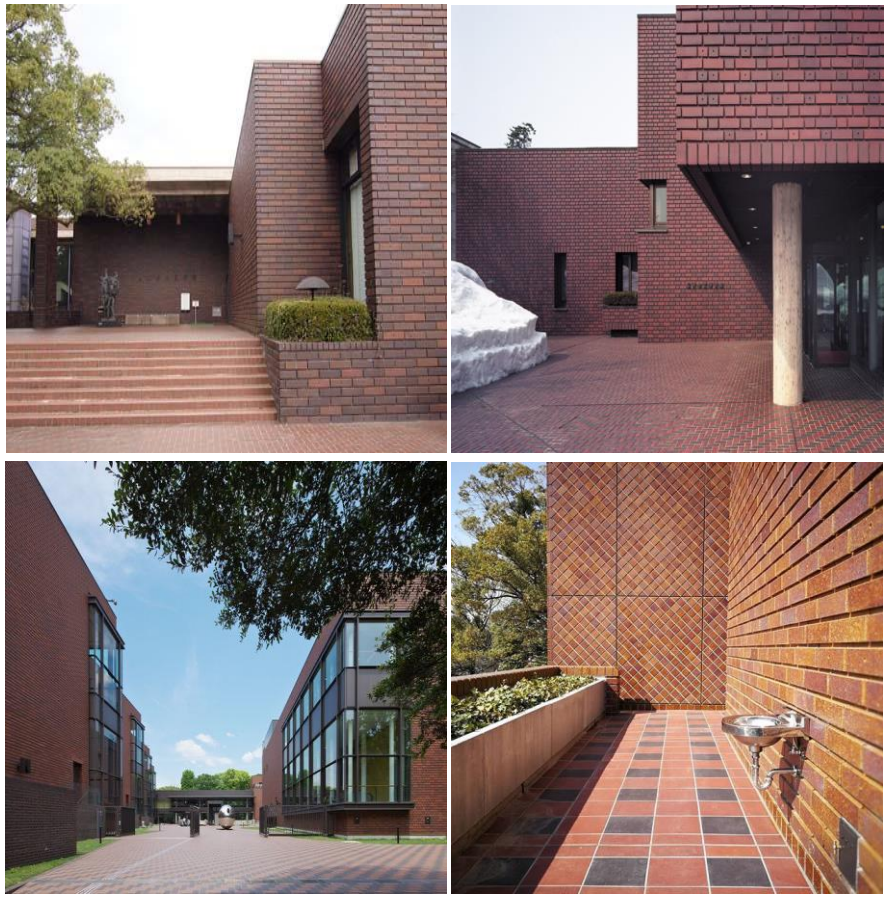
継承の手法C



左：世田谷区役所　右：熊本市美術館

外壁の仕上げ

継承の手法D



左上：熊本県立美術館　左下：東京都美術館
右上：弘前市立博物館　右下：福岡市美術館

打ち込みタイル工法

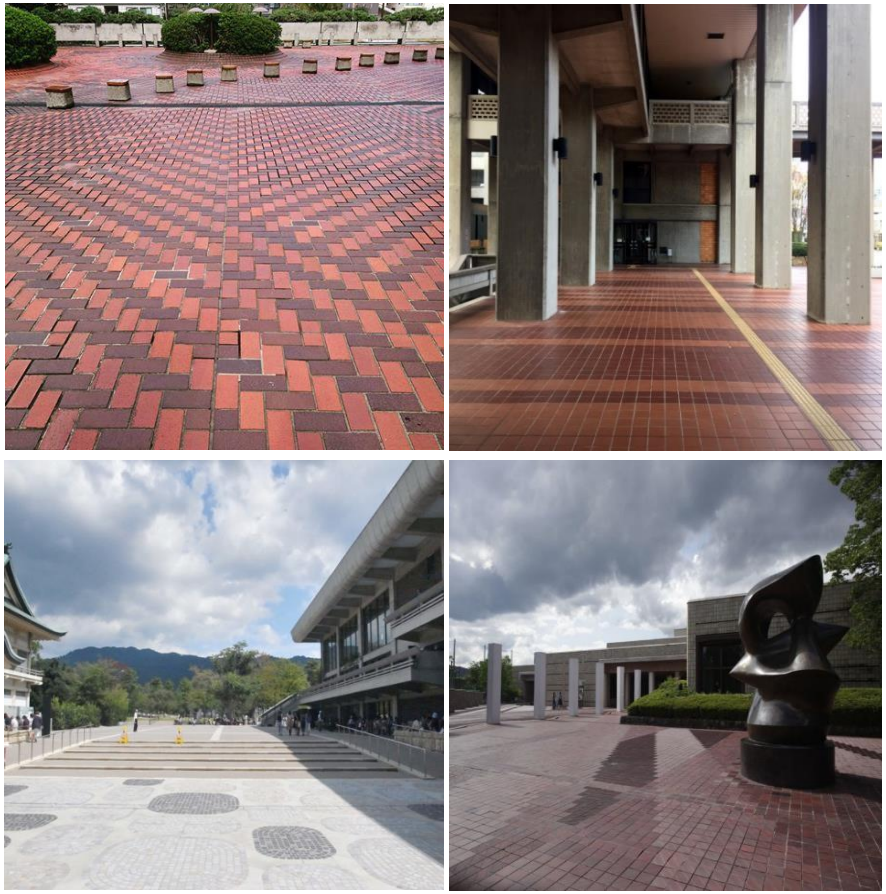
前川は、**時間の経過とともに風合いを増す**ことから土の色が濃く反映される窯業製品のタイルを好み、打ち込みタイル工法を開発した。この打ち込みタイル工法は、同時期（1966年ころ）に記述される**エスプラナードと一貫性**のある設計思想が読み取れる。

外壁足元のディティールは**床舗装と一体的にデザイン**されており、建物のヴォリュームは地形が盛り上がって生まれたような印象をうける。

この工法によって作られる建築群は近代建築がもつ合理的で軽快な印象から離れ、**静かで重たい表情**を持ち、時代や経済の変化によって色あせることのない前川建築の魅力を生み出している。

外構の仕上げ

継承の手法E



左上：埼玉会館　　左下：京都会館
右上：岡山県立庁舎　右下：宮城県美術館

外部床仕上げ（E-1）

埼玉会館、埼玉県立図書館、東京海上ビル、弘前市立博物館、ケルン市立東洋美術館など、打ち込みタイル工法を採用した多くの建物が、**赤褐色の打ち込みタイルと呼応**した赤褐色とグレーのタイルによるパタン舗装となっている。建物によって**ヘリボーン、ボーダー、千鳥等の舗装パタン**の選択はあるが、どれも**建物と外構が同系色**でまとめられ、**街区と建築が一体**のものとしてデザインされている。
京都会館（現ロームシアター京都）や神奈川県立図書館などでは、**角の丸まったさまざまな大きさの四角形**がランダムに配置されたパタンが採用されており、東京都文化会館や新宿紀伊国屋ビルでは**落ち葉をモチーフとした三角形の幾何学模様**のパタンが採用されている。

緑地帯のデザイン

継承の手法E

左上：埼玉県立博物館　左下：国立西洋美術館
右上：弘前市庁舎　右下：埼玉会館

緑地帯のデザイン（E-2）

エスプラナードには、アプローチ部に配置される人の流れを印象付ける**流線型の緑地帯**と、広場内に**島配置される円形の緑地帯**の組み合わせが多く見受けられる。円形の緑地帯の**淵は垂直な立ち上がりがなく**、緑地帯にあわせて円形にパタン化された舗装タイルがぬるりと競りあがるようなディティールでデザインされている。
この円形の島配置の緑地帯はさまざまな作品に登場する。緑地を一箇所にまとめるのではなく**分散することで、様々なシークエンス**を生み、また**緑地の淵を消滅**（床と一体化）させることで、**人々のシーンと植栽が近い**関係を生んでいる。

これらのエレメントはそれぞれが独立したアクロバットな造形も、**流行を追うような姿勢も見られない**。エスプラナードという**全体性によって建物と都市が統合**され、泰然とそこにあり、**静かに人々を迎い入れ、大らかに包み込**んでいる。エスプラナードは前川の設計思想が顕在化された重要なファクターである。

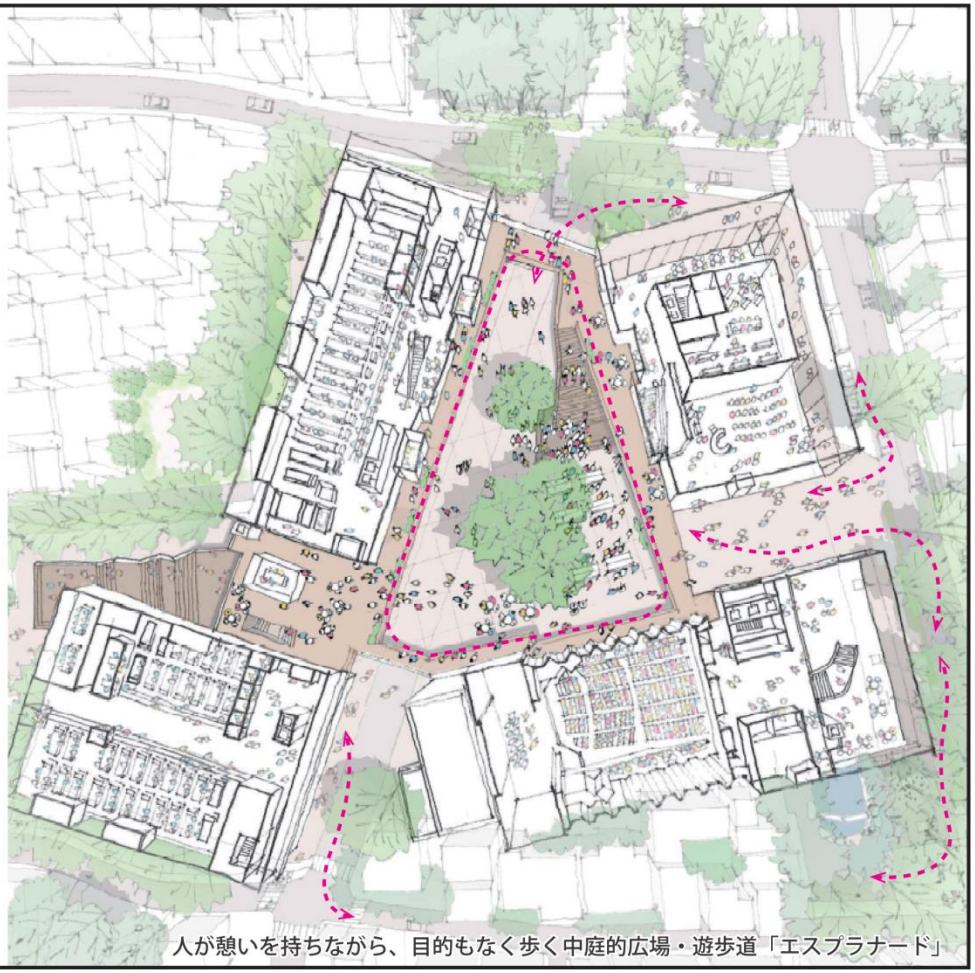
設計案の説明

継承･発展の考えかた

A　広場の構成と設計背景

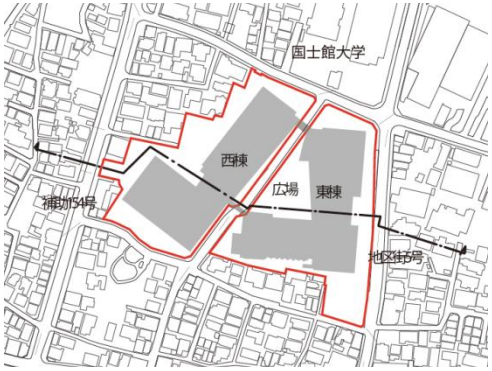
【エスプラナード】

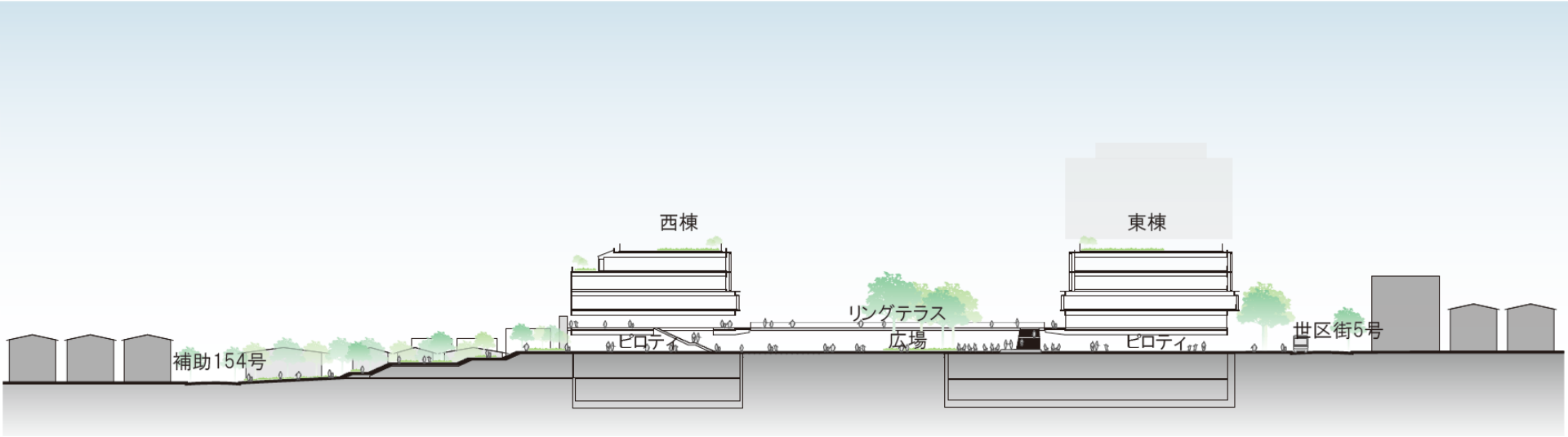
なんとなく囲まれている中庭的広場と、中庭を巡る目的性のない遊歩道が連なる一連の空間構成。



人が憩いを持ちながら、目的もなく歩く中庭的広場・遊歩道「エスプラナード」

広場・周辺建物との高さ関係





階高を抑える・上階を壁面後退させるなどにより、
周辺建物とのスケールを合わせる

継承の手法Aについて

第２回 世田谷リング会議

ひとつながりの『世田谷リング』

― 人がつなぐ、歴史・環境・風景がつながる ―

【４つの空間】
1. 広場を中心とした建物構成
2. 交流空間のつながり
3. ケヤキや池などの豊かな外部空間
4. 区民活動の舞台となる区民会館

現庁舎の空間特質要素 → 継承する → 発展する

設計プロセスのイメージ

4つの空間の連続性(シークエンス)により生まれる風景を、継承、発展。

継承の手法Eについて

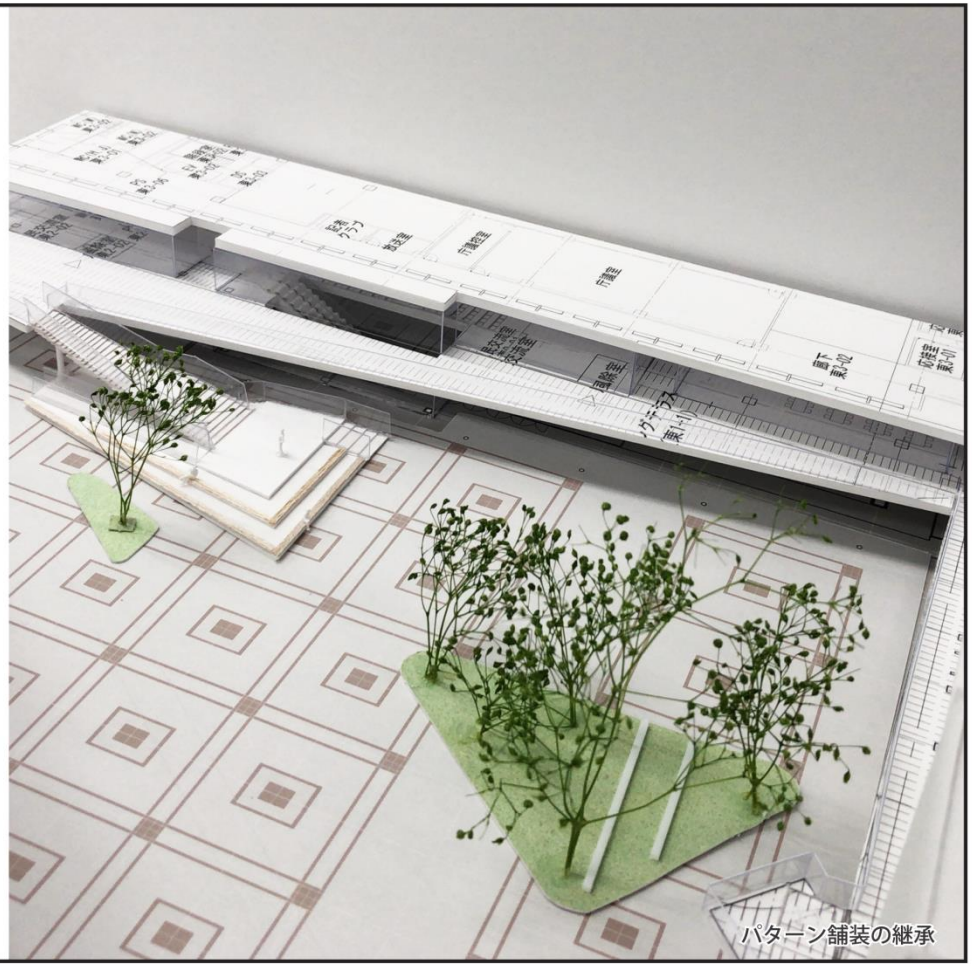
E　外構の仕上げ

【外部床仕上げ】

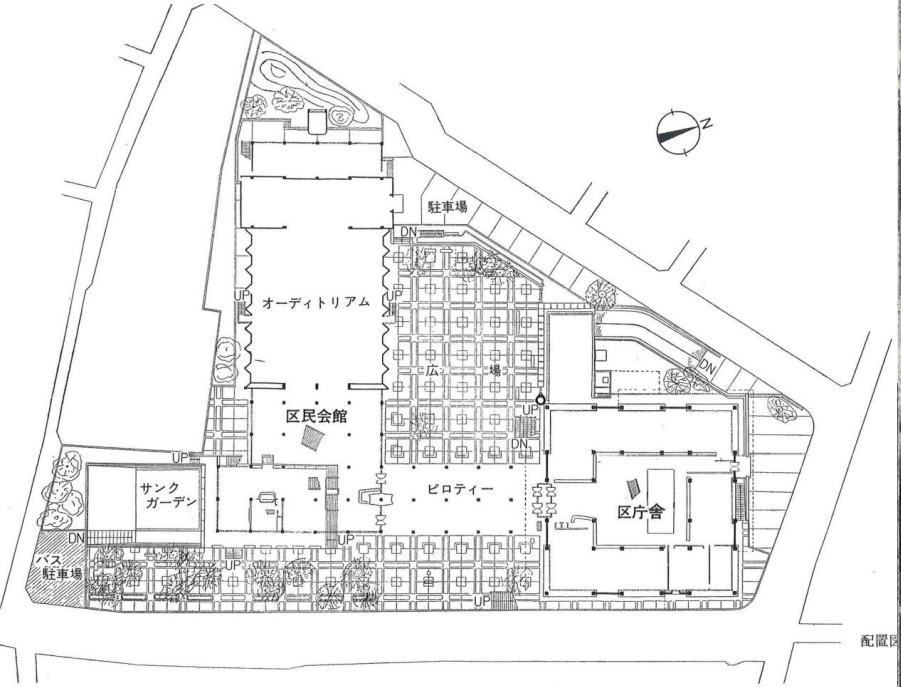
多くの作品に、赤褐色とグレーのタイルによるパターン舗装が使われている。

【緑地帯のデザイン】

エスプラナードには、人の流れを印象づける緑地帯と、広場内に島配置される緑地帯の組み合わせが多い。



継承の手法Eについて

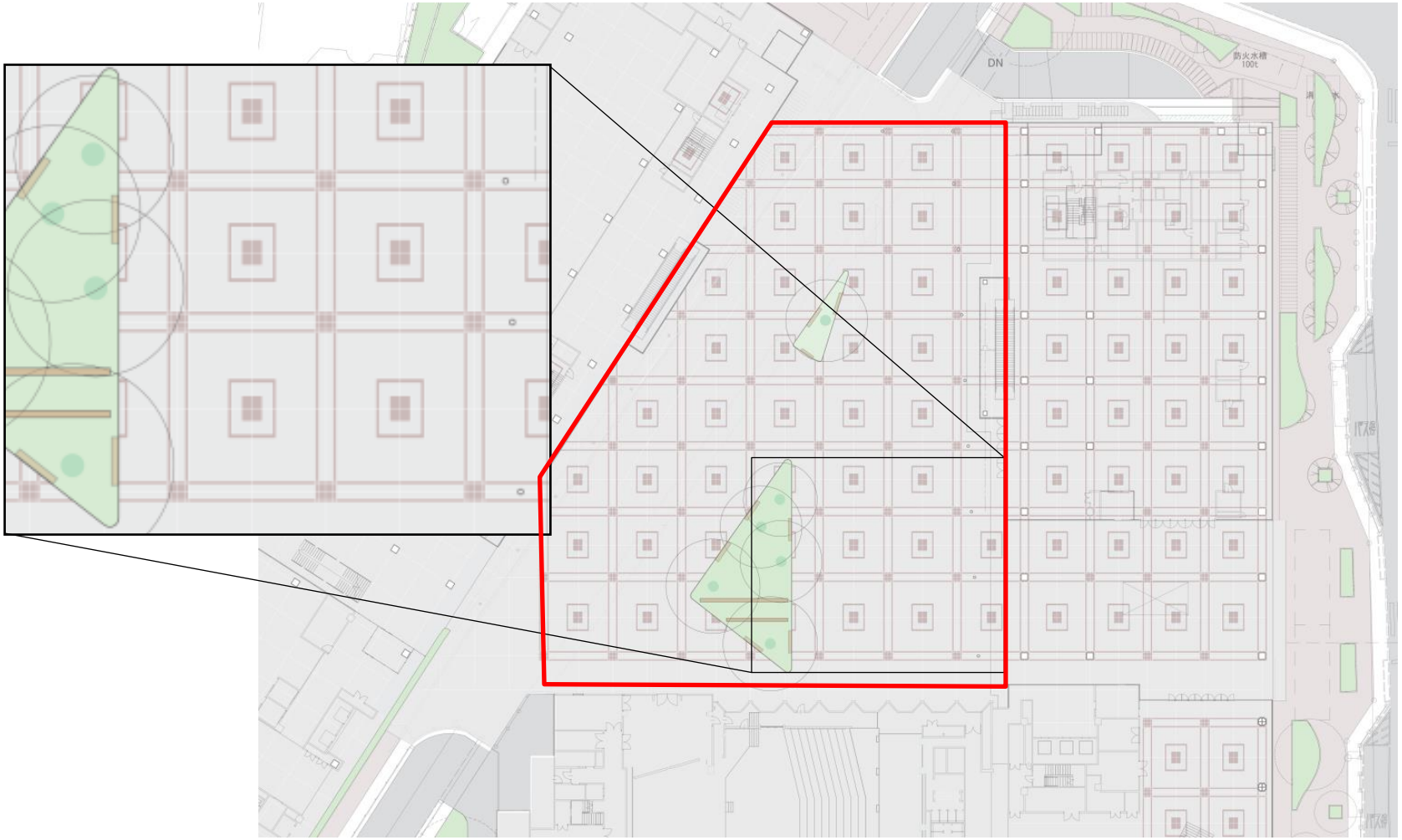


配置図

中庭とオーディトリウムの壁

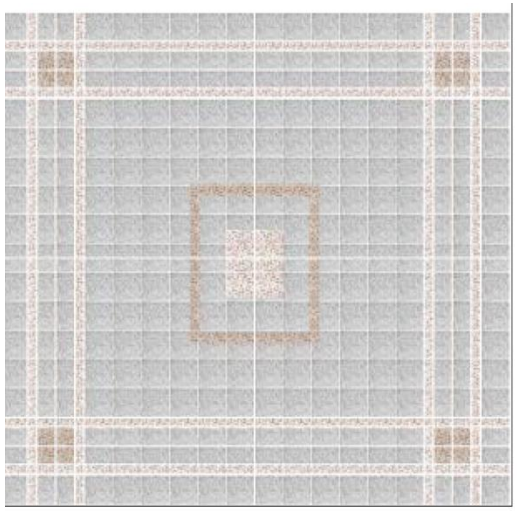
竣工当時の広場のパターン。グリットパーターンは、
スケール感を抑える（ヒューマンスケール）安心感を与える。

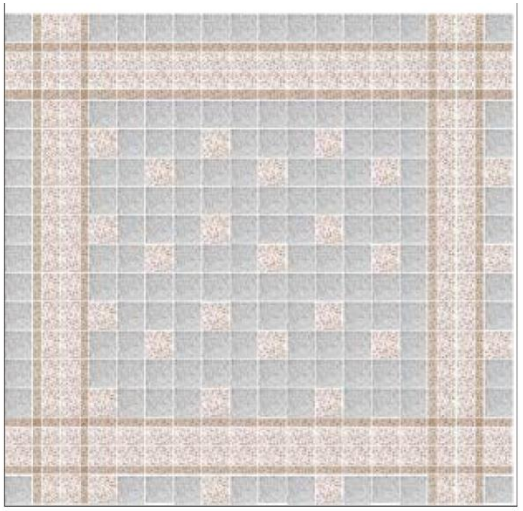
継承の手法Eについて

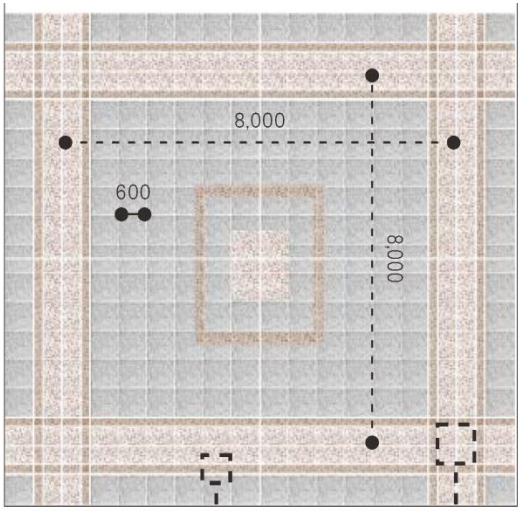


広場のパターンを再価値化し、再生。
素材は、現代の環境配慮素材（省エネ、CO2削減、地球環境保全）
グリーンインフラとして、保水、透水性舗装を行います。

継承の手法Eについて

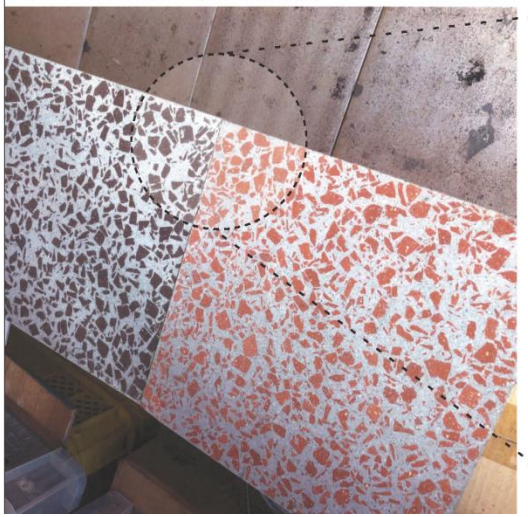


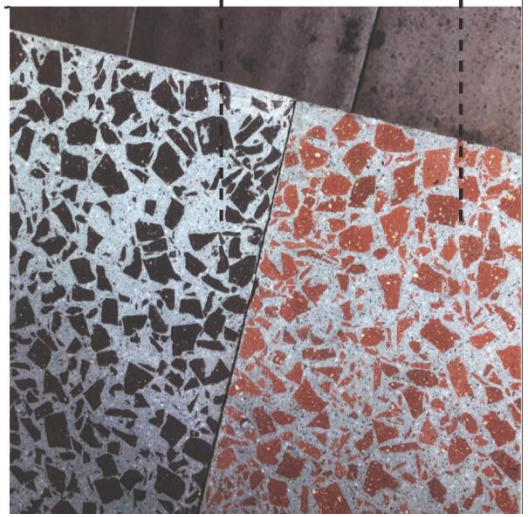




既存中庭のタイル

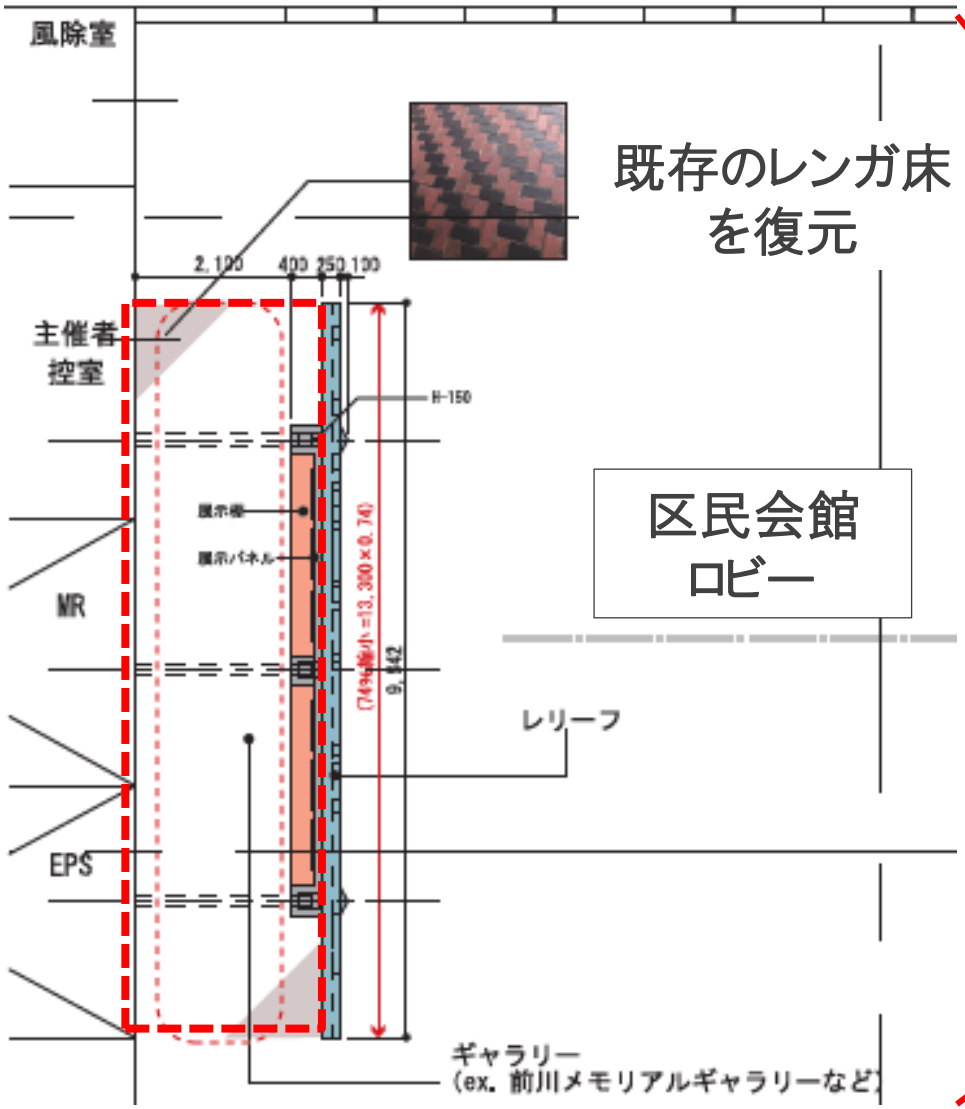
既存のタイルを粉砕して研いだ見本

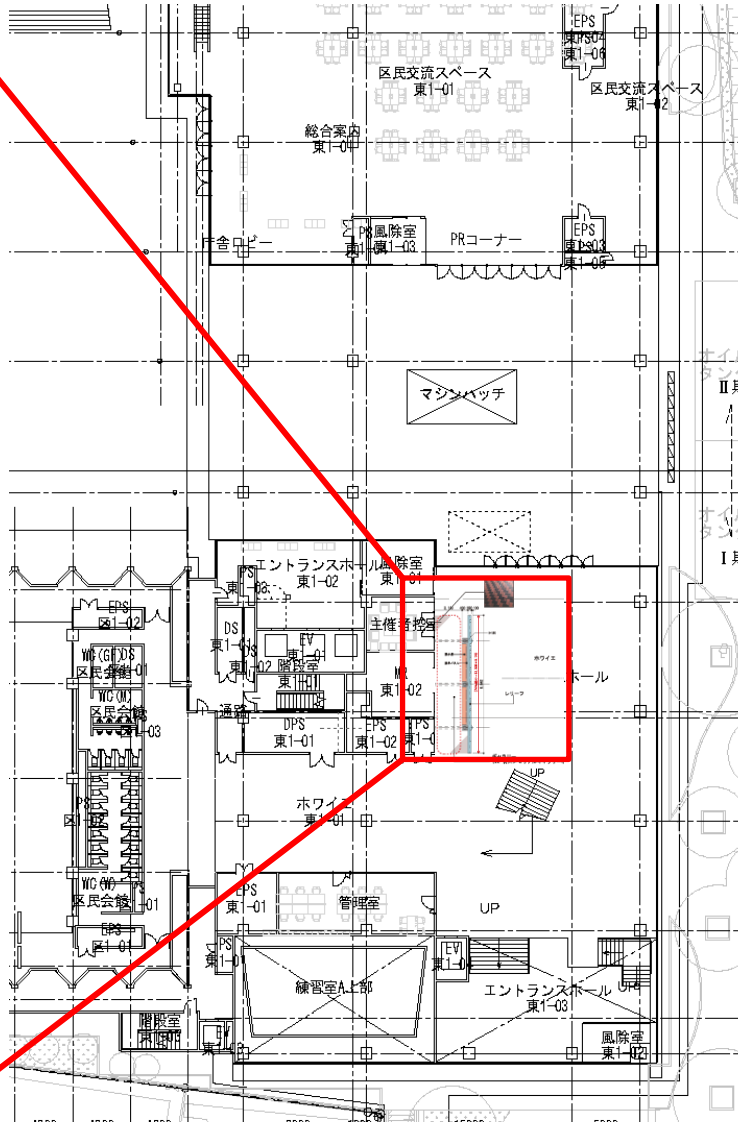




既存のレンガ床を、保水性ブロックに混入し、再生します。

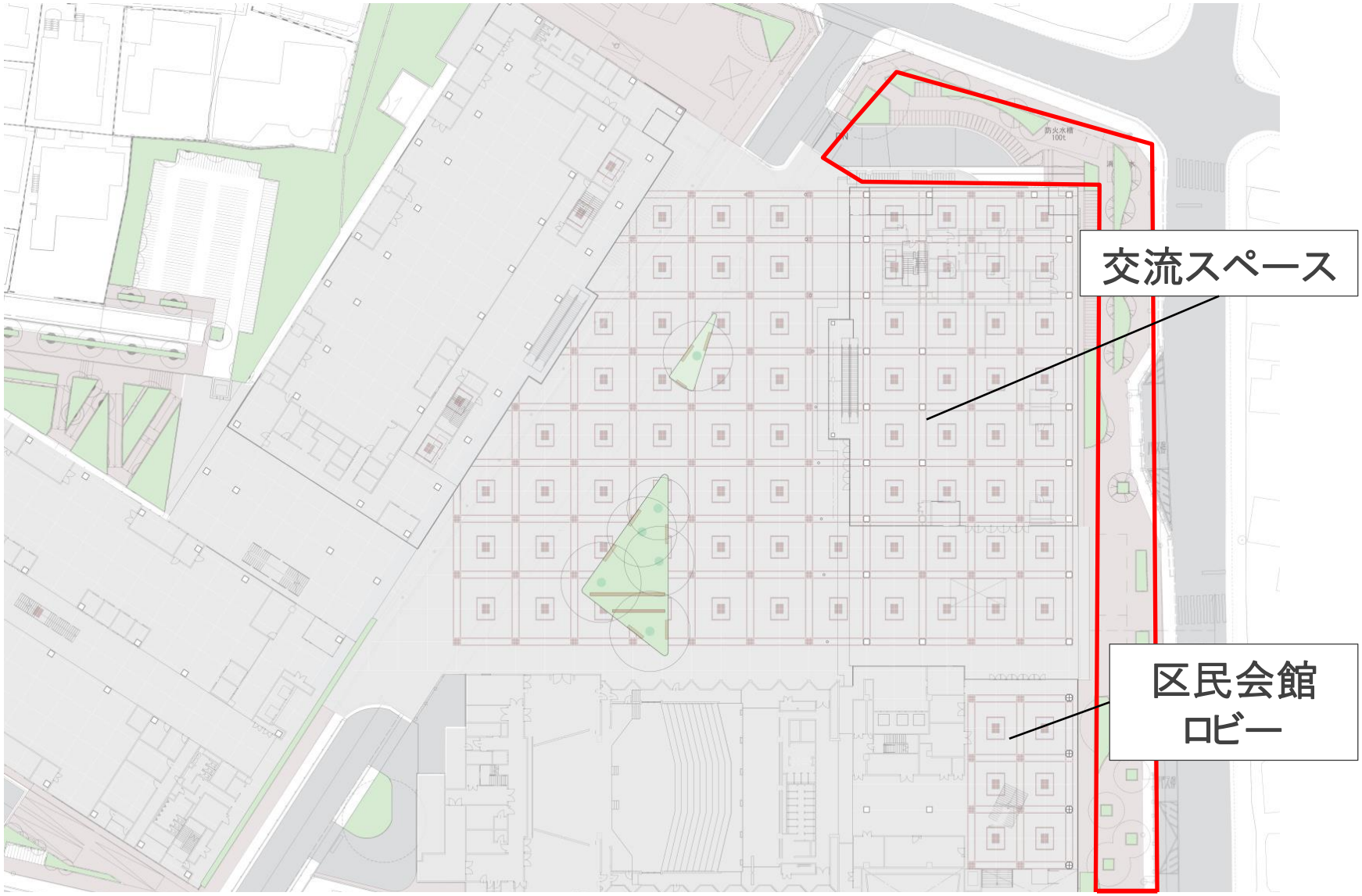
継承の手法Eについて





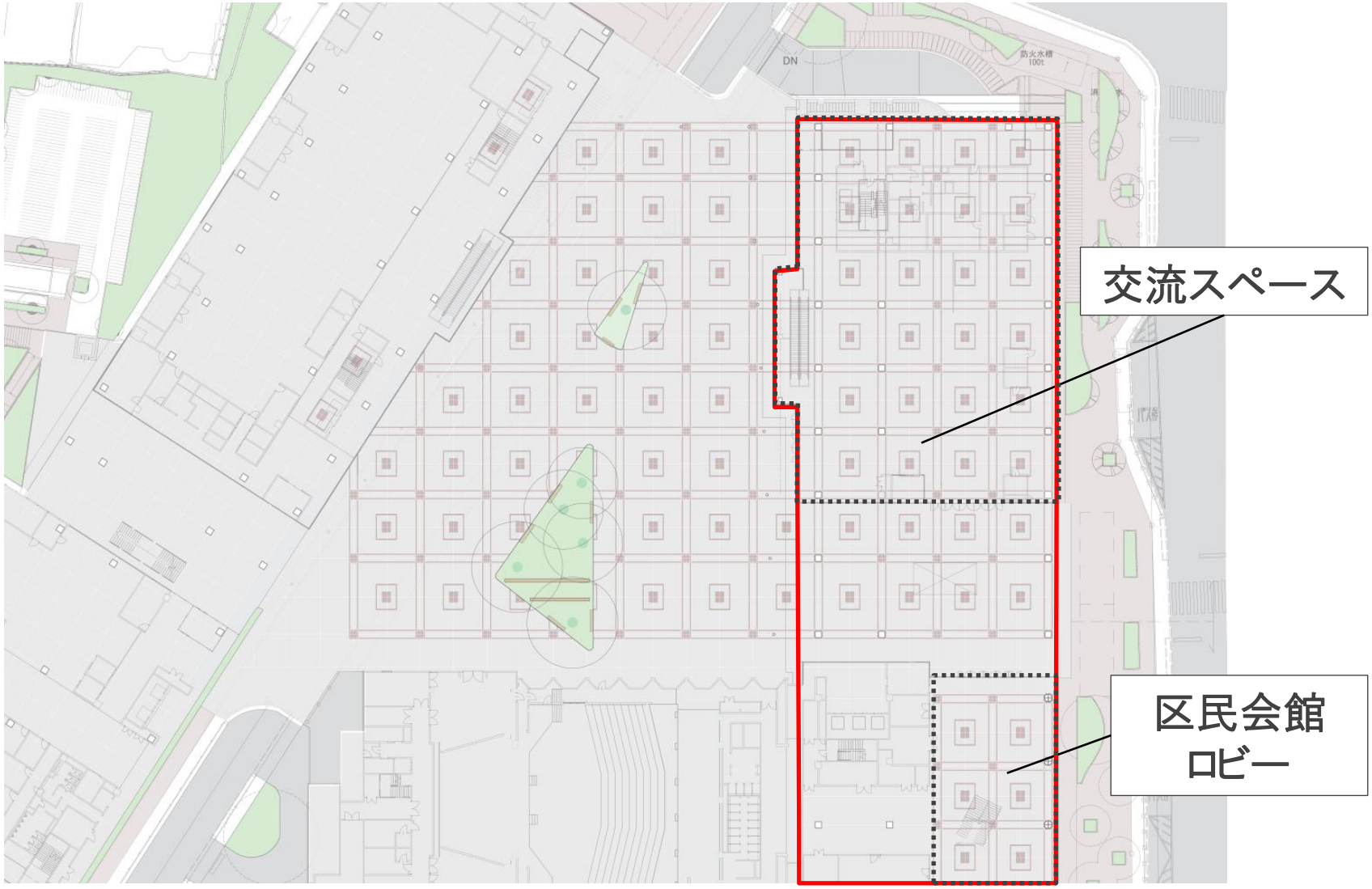
既存のレンガ床は、前川メモリアルギャラリーの床に復元し、
広場の床材に使用されていることをサイン表示し、記憶として継承。

継承の手法Eについて



ケヤキ並木部分は、現在の風景を継承、発展させ、
既存床パターンを、保水性ブロックで再生。

継承の手法Eについて



交流スペースなどの屋内空間は、使い勝手を考慮し、石材を使用。
緑地の淵は立ち上がりを設けず、人々のシーンと植栽が近い関係をつくる。

継承の手法Bについて

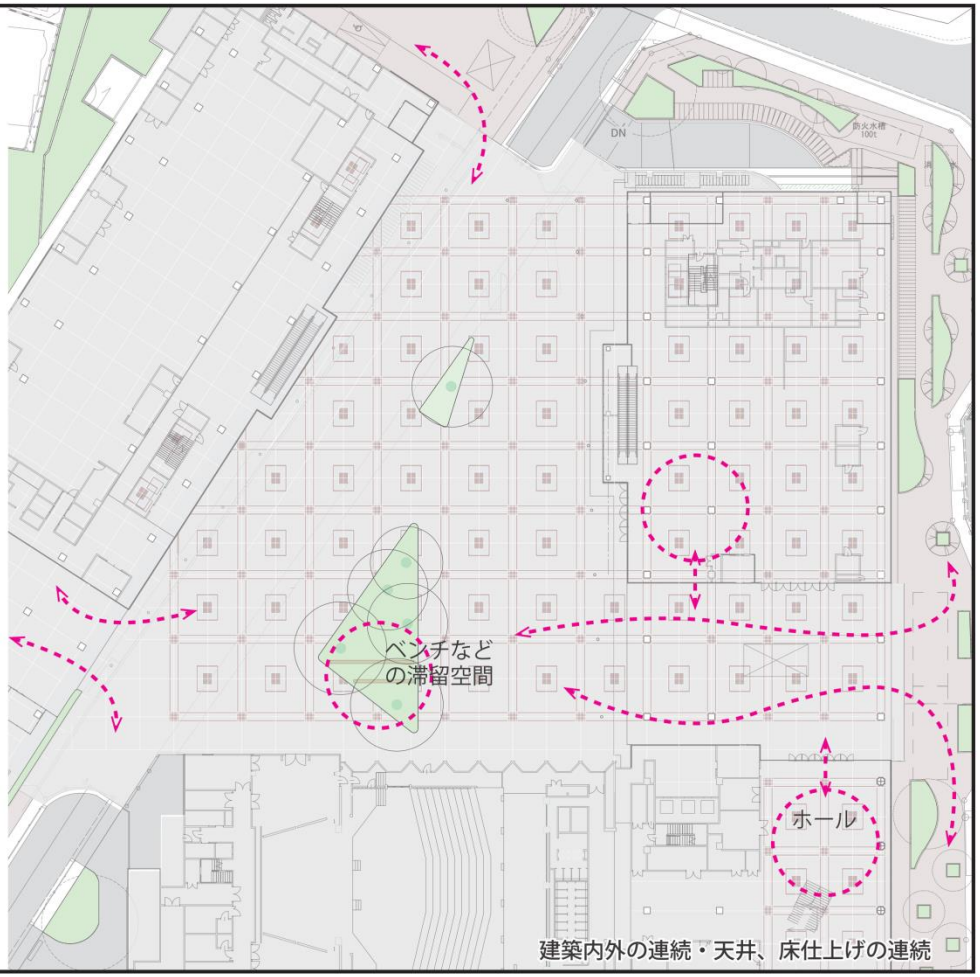
B　内外の空間の連続性

【建築内外の連続】

建物内外に連なる動線の中に広場のベンチやホールのベンチなど市民が気軽に留まることのできる空間を配置するという、流動性と対流性が混ざり合った全体性により獲得されている空間。

【天井、床仕上げの連続】

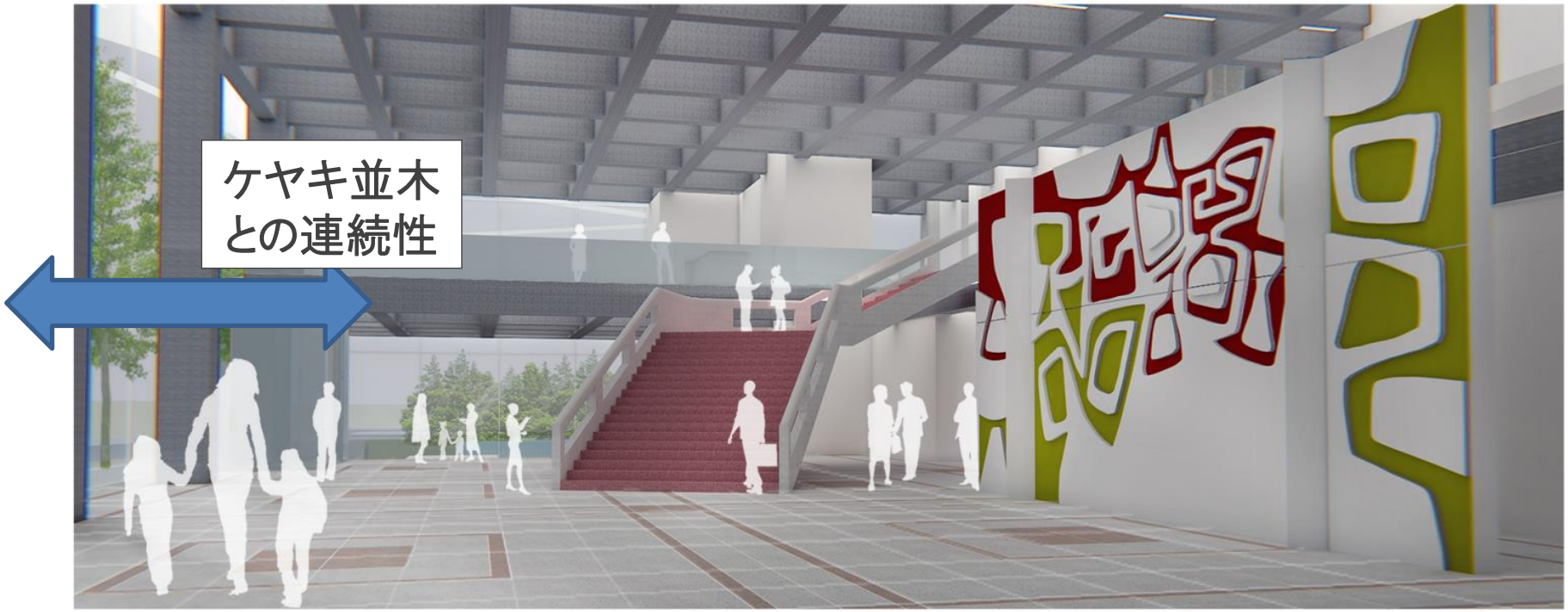
外部に面するホワイエやホールでは、天井や床の素材を外部空間と連続的に設えている作品が多く、外部と内部を明確に分けるのではなく、空間の連続性を重要視。



建築内外の連続・天井、床仕上げの連続

継承の手法Bについて

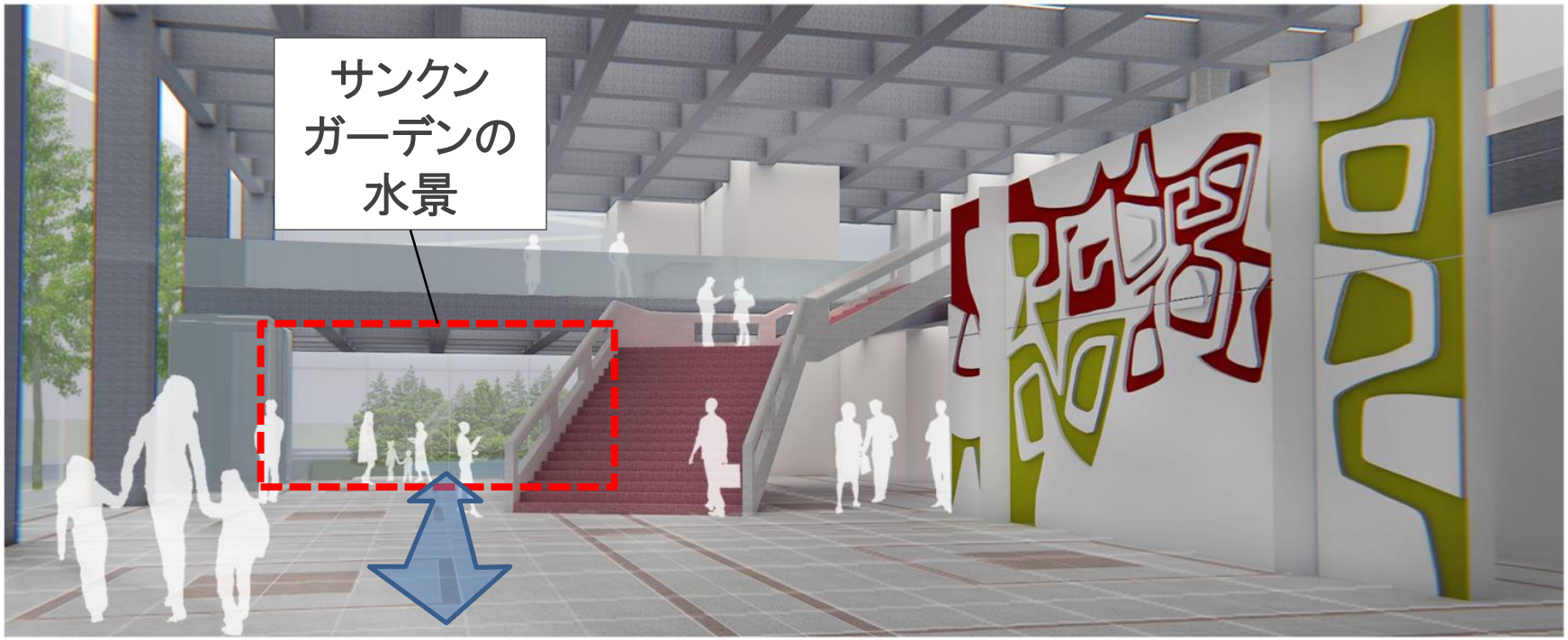
区民会館ホワイエ



区民会館ロビーは2層吹き抜けで、
ケヤキ並木のアプローチプロムナードから透明な空間で連続。

継承の手法Bについて

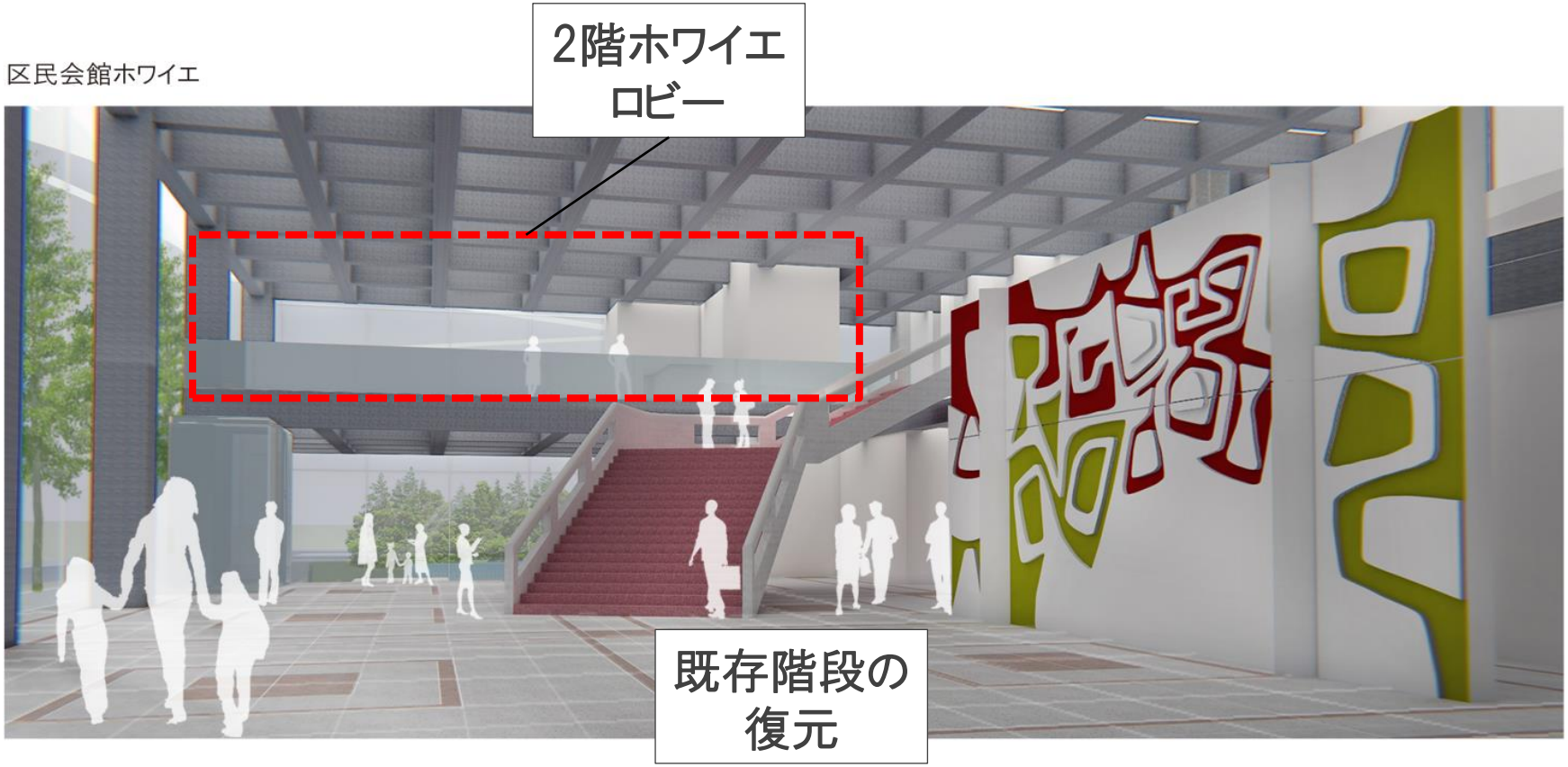
区民会館ホワイエ



サンクンガーデンの水景は、設備更新を行いますが、
できるだけ現状の風景として再生。
ロビーと視線が抜け、内外一体となった空間構成。

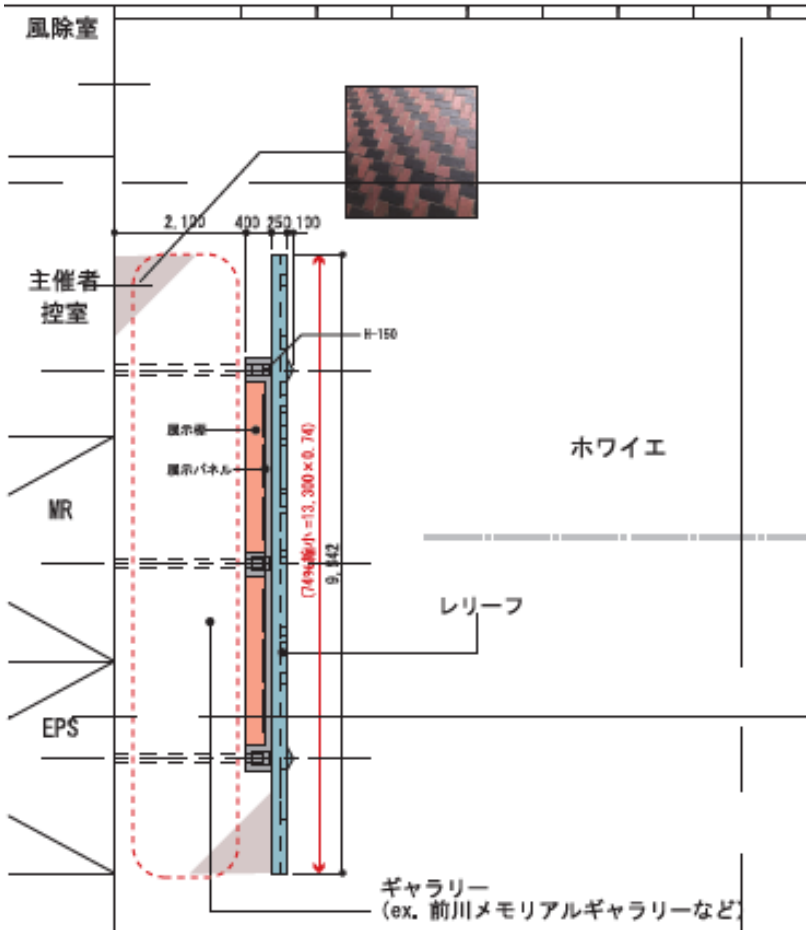
継承の手法Bについて

区民会館ホワイエ

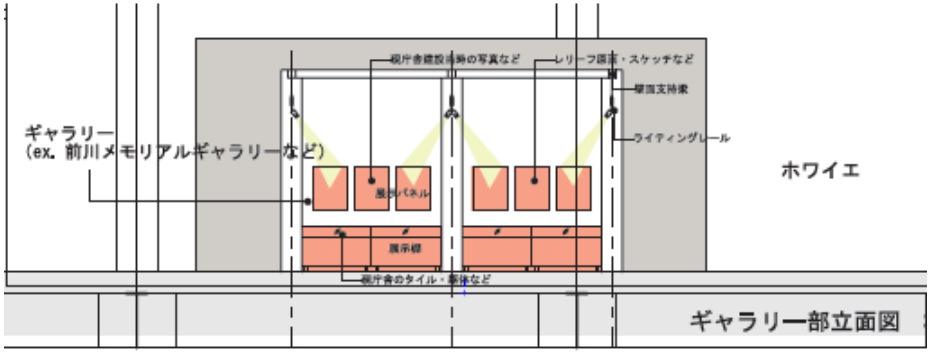


2階部分にホワイエのロビーを配置し、ラウンジ、カフェスペースとして活用を検討。
既存の階段は、現状法規に見合う蹴上、踏面に更新（復元）。

継承の手法Bについて



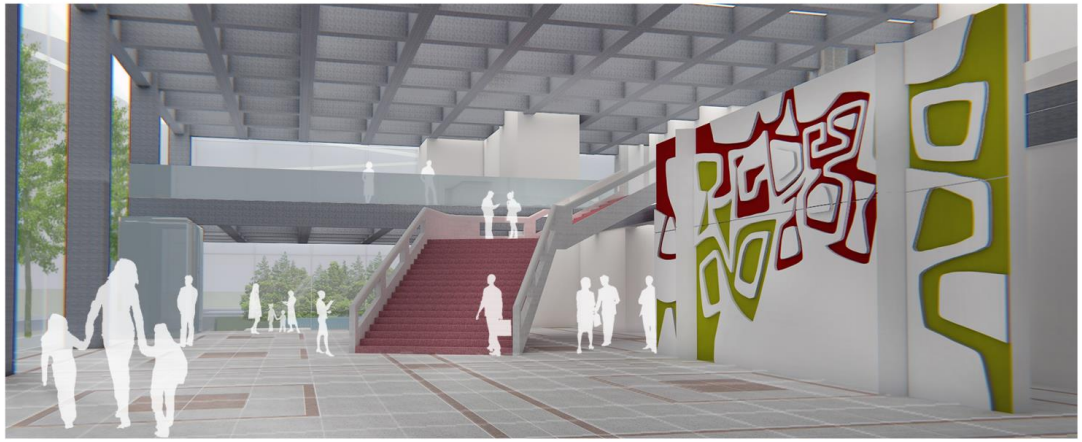
レリーフ後ろ側をギャラリーとして利用



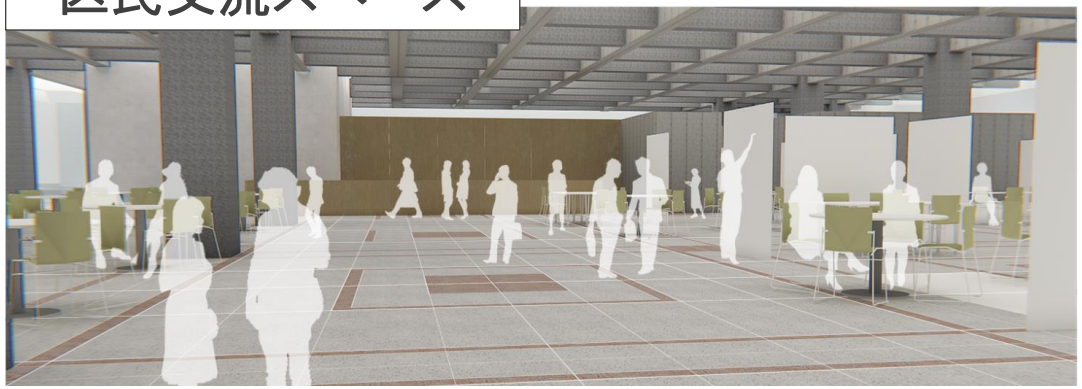
第一庁舎のレリーフを、復元し、後側は「前川メモリアルギャラリー」として、世田谷区庁舎、区民会館の図面や写真、同時代の建築などを展示。

天井イメージ

区民会館ホワイエ



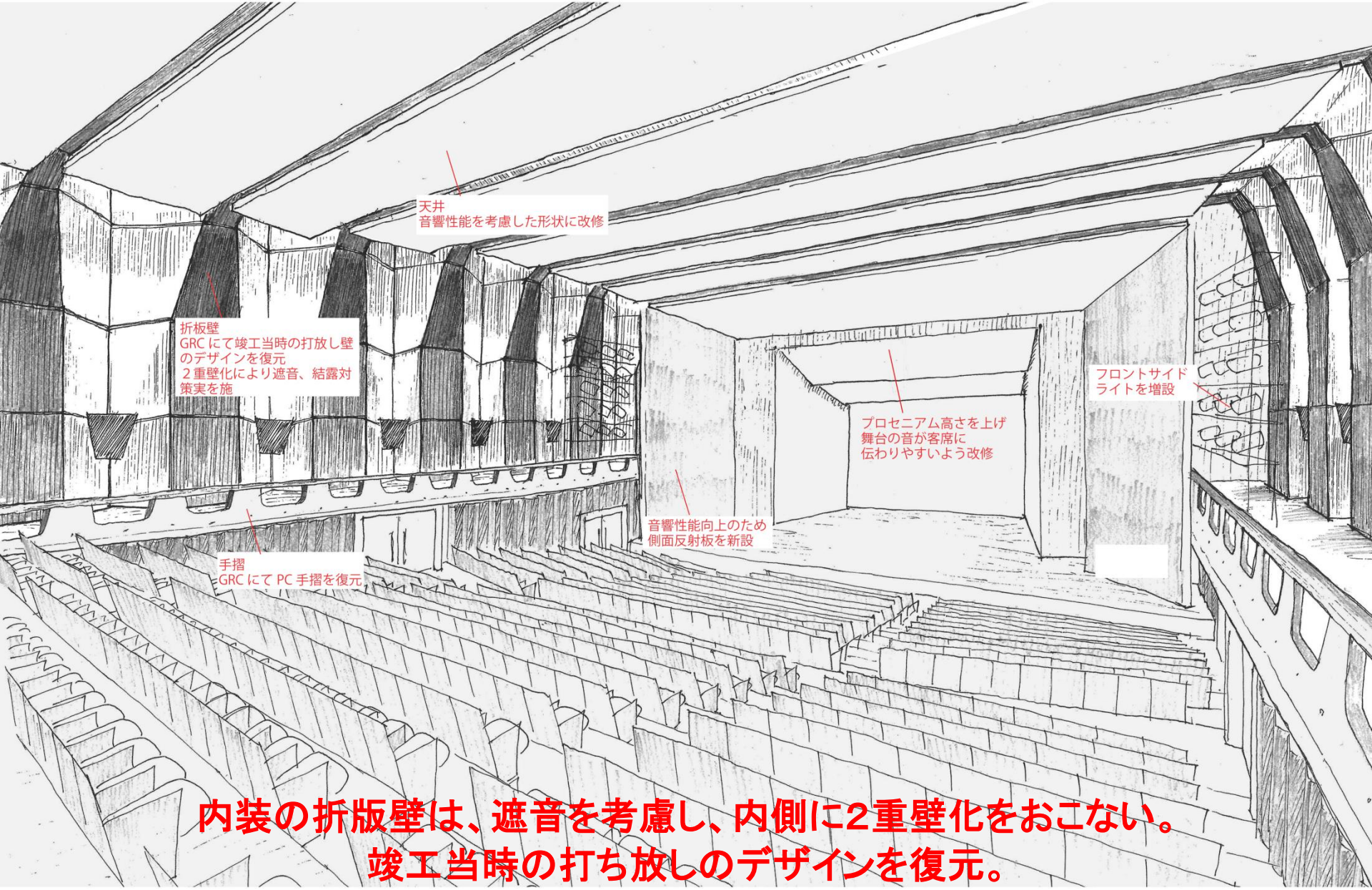
区民交流スペース



既存庁舎写真

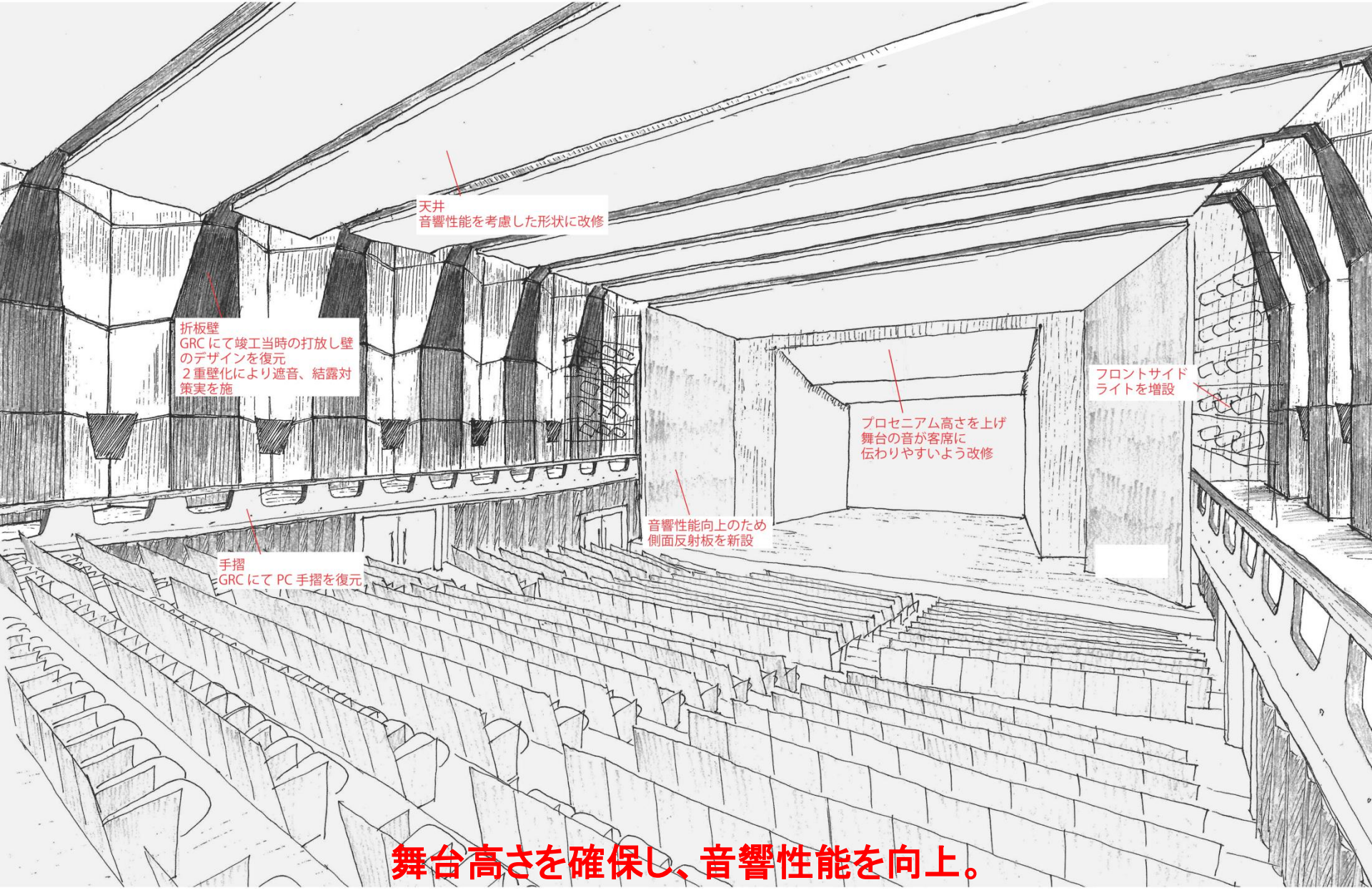
天井材は、既存のRC格子天井を鉄骨構造の意匠で再現。

ホール内部イメージ



内装の折版壁は、遮音を考慮し、内側に2重壁化をおこない。
竣工当時の打ち放しのデザインを復元。

ホール内部イメージ



舞台高さを確保し、音響性能を向上。

継承の手法Cについて

C　微地形の形成

【階段・半地下・人工地盤】

アプローチ、広場、建築が地形と一体化されることで、敷地全体を都市の連続体として位置づけられている。

広場・ステージ・大階段・リングテラスが微地形として、連続した空間をつくる

継承の手法Cについて

レベルを少し変え、視線の変化を与えることで、
何もない空間に変化が生まれ、空間の質を高める。

継承の手法Dについて

D　外装

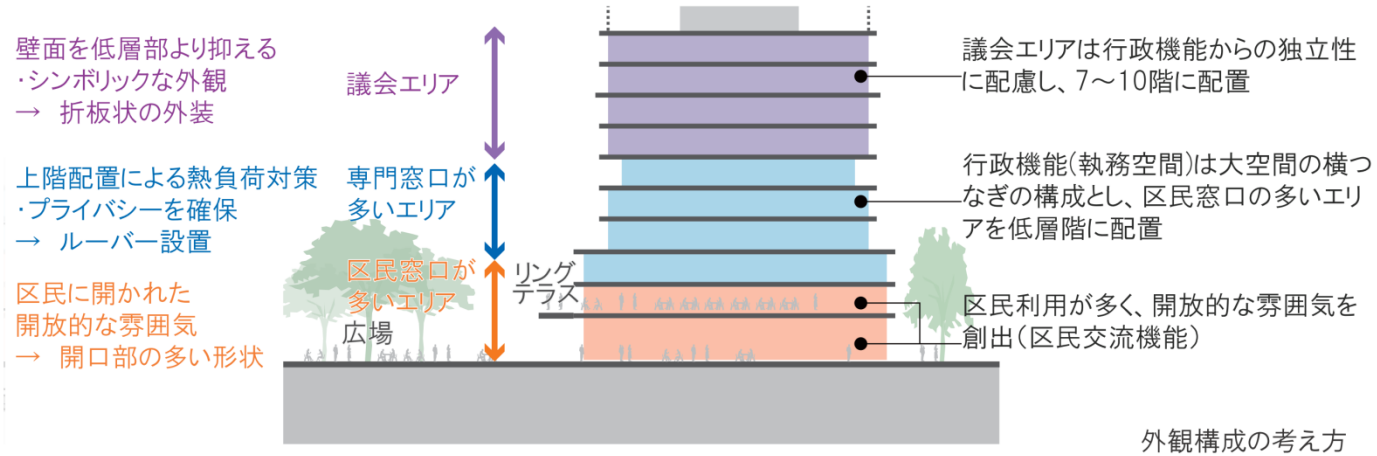
【折板構造】

区民会館の外壁は、折板構造のコンクリートにより作られ、その形が内部空間にもデザインとして表れている。
広場に面する区民会館の折板構造外壁は、広場の風景を構成する１つとして、世田谷区役所の原風景となっている。

区民会館の折板構造の外壁

折板構造のデザインを継承した本庁舎の外観

継承の手法Dについて



外観構成の考え方

外観の構成は、3層構成とし、区民利用、執務、議会など用途に応じ、
また、周辺環境との調和に配慮した構成。

継承の手法Dについて

区民会館の折板構造の外壁

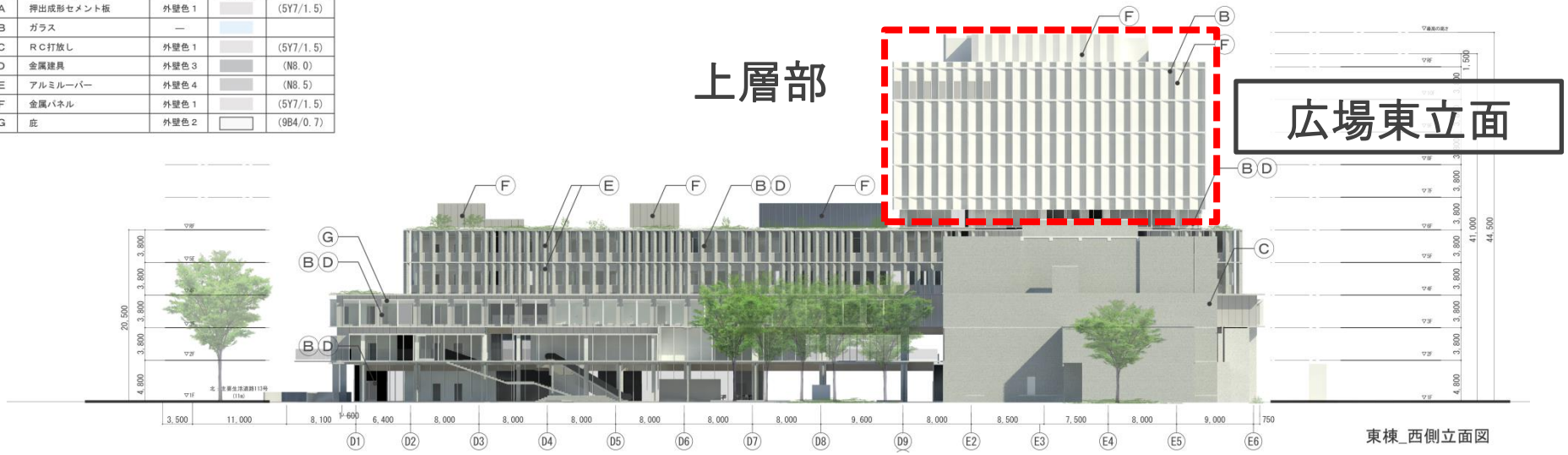
コンクリートの仕上げは、金属などと異なり、
年月を重ねるとそれなりに風化しますが、味わいが増す仕上げです。

継承の手法Dについて

記号	素材名	色彩	色彩凡例	マンセル値
A	押出成形セメント板	外壁色１		(5Y7/1.5)
B	ガラス	―		
C	ＲＣ打放し	外壁色１		(5Y7/1.5)
D	金属建具	外壁色３		(N8.0)
E	アルミルーバー	外壁色４		(N8.5)
F	金属パネル	外壁色１		(5Y7/1.5)
G	庇	外壁色２		(9B4/0.7)

上層部

広場東立面

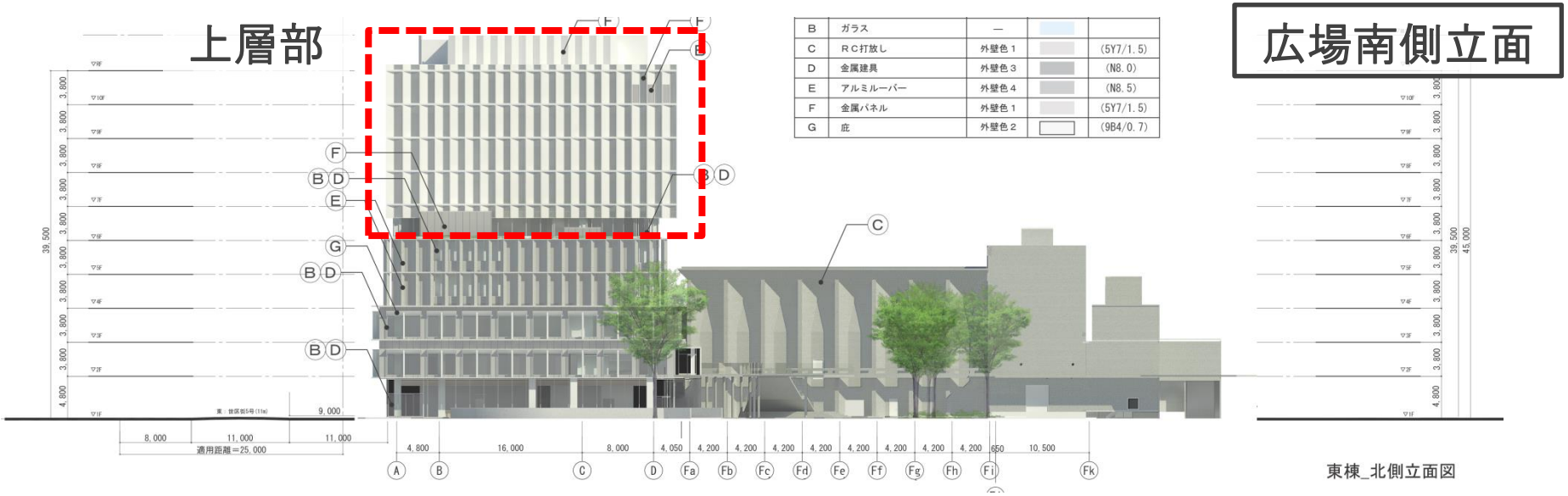


東棟_西側立面図

上層部

広場南側立面

B	ガラス	―		
C	ＲＣ打放し	外壁色１		(5Y7/1.5)
D	金属建具	外壁色３		(N8.0)
E	アルミルーバー	外壁色４		(N8.5)
F	金属パネル	外壁色１		(5Y7/1.5)
G	庇	外壁色２		(9B4/0.7)



東棟_北側立面図

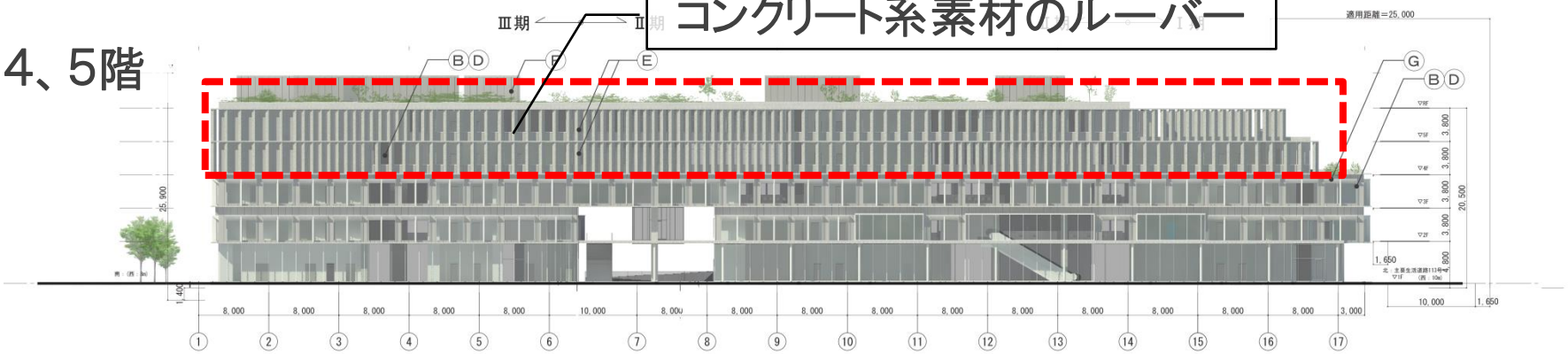
上層は、シンボル性に配慮した、折板のモチーフとし、
清掃のし易さや環境性能に配慮し、アルミパネルとガラスの構成。

継承の手法Dについて

広場西立面

コンクリート系素材のルーバー

4、5階

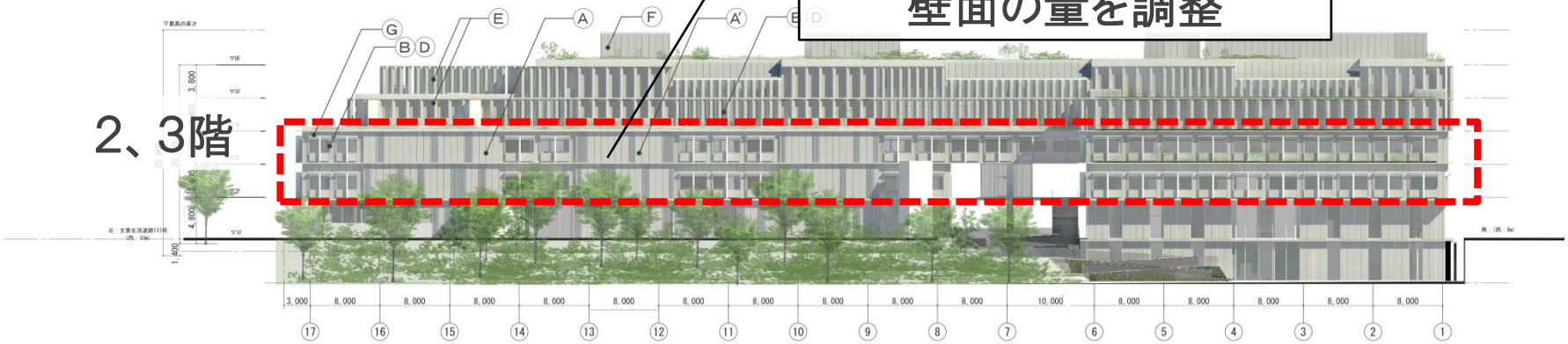


西棟_東側立面図

B	ガラス	―		
C	ＲＣ打放し	外壁色１		(5Y7/1.5)
D	金属建具	外壁色３		(N8.0)
E	アルミルーバー	外壁色４		(N8.5)
F	金属パネル	外壁色１		(5Y7/1.5)
G	庇	外壁色２		(9B4/0.7)

近隣に配慮し、部分的に
壁面の量を調整

2、3階



西棟_西側立面図

4、5階ルーバーはコンクリート系とし、風合いの出る外観。
2、3階は区民利用、執務空間に配慮し、開放率の高い外壁とし、
堀の深い陰影のある表情をつくる。

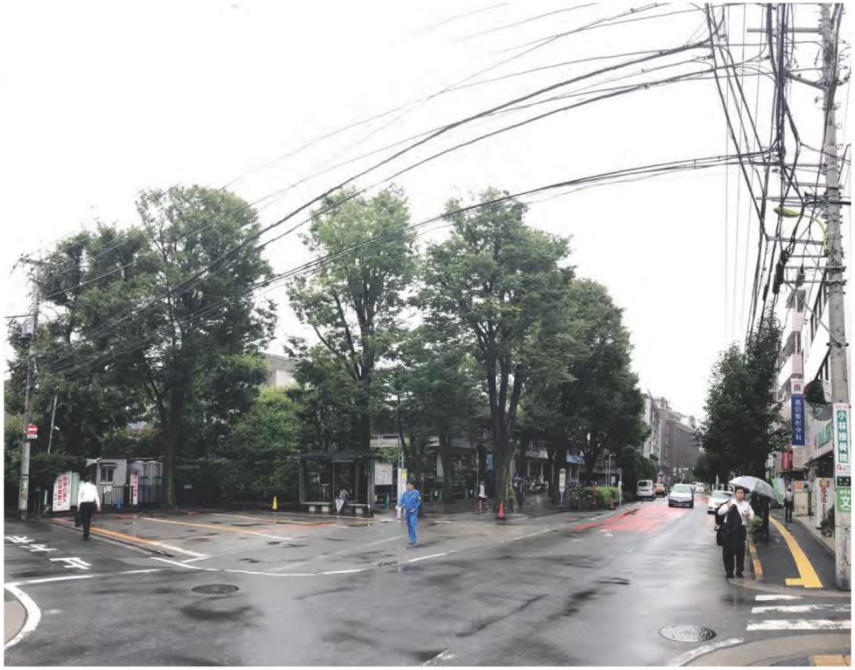
現段階の完成予想図

現況写真

完成予想図

北東角は、ケヤキ並木の連続、
建物セットバックにより開放感を確保。

現段階の完成予想図



南東側アプローチ外観は、緑を拡充し、
ケヤキ並木に面して2層吹き抜けの透明なホワイエロビーを設置。

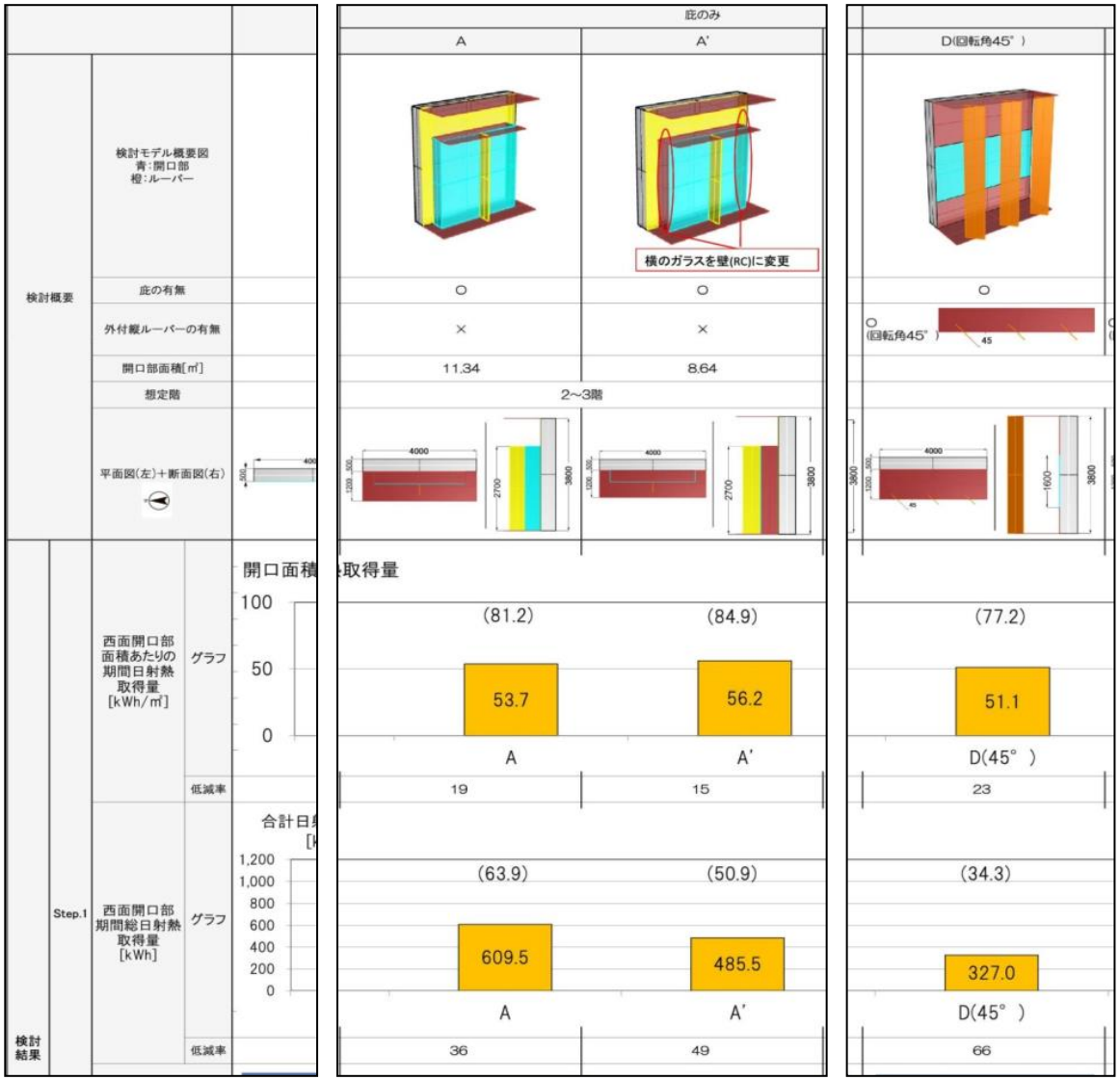
現段階の完成予想図

道路も広場と同様の仕上げ材となり、
リングテラスに囲まれた広がりのある広場。

現段階の完成予想図

新たな西側アプローチは、建物高さを抑え、
歩行者を迎え入れる設え。

ファサードの熱負荷計算



外壁の性能の環境シミュレーションにより
CASBEE　Sランクを実現。

人生100年時代、社会とともに、環境とともに